平成 20 年度公共交通活性化総合プログラム

# 「地域と創る持続可能な離島観光モデルづくり・離島単独航路の維持活性化調査」報告書

【沼島モデルプロジェクト】

平成 21 年 3 月

国土交通省神戸運輸監理部

# はじめに

離島においては人口減少、高齢化が著しく、離島住民にとって唯一の交通手段である航路は、近年の原油高騰の影響も相まって厳しい経営状況が続いており、航路維持は全国の課題となっています。

本調査は、離島住民にとって欠くことのできない生活航路を維持活性化すべく、観光交流人口の増加で航路の下支えをすることに着目し、航路利用者である島民、事業者を行政と大学がサポートしながら、離島が持つ資源（歴史、自然、味覚、コミュニティ等）を観光資源として再評価し、観光と島の暮らしとの調和を保ちつつ生活航路と島の活性化を図るモデルの構築を目指したものです。

本調査のモデル地域は、兵庫県淡路島の南に位置する人口約600人の小島、沼島です。沼島と淡路島を結ぶ航路は離島単独航路として国等の補助を受けており、厳しい経営状況から、島民、事業者とも将来、航路を維持できるか不安を抱いています。

そこで、豊かな自然、地場産業、地域コミュニティの結びつきという島の長所を大切に、島民自らが主体となり、島内外の関係者の協力を得ながら、観光による地域づくりを行うことで、生活航路と島の活性化を図る調査プロジェクトを実施しました。

今回の取り組みは、地域全体で生活航路と島の将来を語り合い、協働する契機となりました。委員会・地元部会を経るごとに、当面取り組むべき課題と今後の方向性（マスタープラン）が明らかになるなど、取り組みの手法は全国の離島のみならず山村等の過疎地域においても応用しうるものです。

最後になりますが、委員会及び地元部会に参加いただいた産学官民の各位、講演等でご指導いただいた各位、調査にご協力いただいた沼島の皆様に対して、厚く御礼を申し上げます。

国土交通省　神戸運輸監理部

# 目　　次

## 本　　編

１．要約・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．沼島の現状と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（１）兵庫県南あわじ市沼島（ぬしま）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（２）人口・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（３）産業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
（４）ぬぼこの会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
（５）沼島総合開発会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

３．沼島航路の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

４．バリアフリー化の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

５．提言に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（１）調査のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（２）沼島における観光の現状と取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（３）沼島モデルの取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
（４）沼島モデルのポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

６．提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　マスタープラン（取り組み方策）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

７．シンポジウム（神戸）、報告会（沼島）概要・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
（１）沼島モデルシンポジウム(平成 21 年 1 月 29 日　神戸)・・・・・・・・・・１８
　　パネルディスカッション記録
（２）沼島モデル報告会(平成 21 年 2 月 7 日　沼島）・・・・・・・・・・・・・・４９

## 資　　料　　編

参考資料
（１）離島航路（沼島汽船㈱）の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
（２）ぬぼこの会概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３
（３）観光による地域づくりの先進事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
（４）報道記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７

委員会記録
（１）委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８０
（２）委員会･地元部会の活動記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８１

## １．要約

### （１）調査のねらい

本調査は、人口減少・高齢化、近年の原油高騰等で、全国的に経営環境が厳しさを増している離島航路について、航路事業者、島民、行政、大学が協働して、観光交流人口の増加で、航路と島の活性化を図る公共交通活性化総合プログラムのリーディングモデル「沼島モデル」の構築を目指し、兵庫県南あわじ市沼島をモデル地域に①航路利用者である島民の主体的参加、②航路事業者、島民、行政、大学の地域協働、③島の生活、自然、地場産業と観光の調和等の観点から取り組んだものである。加えて、今後の中高年層等の旅行需要を見据え、ユニバーサルツーリズムの視点から船舶や島内施設のバリアフリー状況の調査も実施した。

### （２）調査体制

調査のために、地元関係者(観光ボランティアグループ「ぬぼこの会」、沼島の各種団体の代表で構成される「沼島総合開発会」)、学識経験者、関係行政機関による産学官民からなる委員会を設置し、また、島内の合意形成を重視するため、沼島に「地元部会」を設置した。

委員会及び地元部会を計５回開催し、海事、交通、観光に係る産学官の専門家による講演、指導、現地調査を実施した。加えて漁業関係者及び学校関係者との意見交換も行い、地元の声を取り込んだ持続可能な沼島モデルの構築を目指した。

### （３）調査手順

委員会・地元部会では、生活航路と島の活性化を図るために必要な課題の抽出作業を行い、具体的な取り組みをマスタープラン（取り組み方策）にまとめた。この作成作業の過程は、観光の活用による生活航路と島の活性化に対する島民の期待と不安を共有し合意形成を図る上で、とても重要なプロセスと考えた。

第１回委員会・地元部会では、沼島における旅客航路と観光の現状を把握した。

島民が約 600 人の沼島。離島単独航路である沼島汽船は、沼島と淡路島を結ぶ生活航路であるが､島民の利用のみで航路を維持することは困難なため､国等が補助している。しかし国等の財政事情もあり､将来の航路維持に対して不安を抱える島民も少なくない。そこで、生活航路と島の活性化は、島民自らが主体的に取り組まねばならない課題であることと、観光を活性化に活かすことを共有した。

第２回地元部会では、沼島をよく知る外部講師からエコツーリズムについてアドバイスを受け、第２回委員会では地元部会メンバーも参加して、陸上及び海上周遊コース体験ツアーを実施し、沼島の持つ観光資源の確認と再評価を行った。

また、課題抽出の過程において、島の将来を担う子供たちと漁業関係者に対する参加期待が高まったことから、小中学校関係者及び漁業関係者有志との意見交換会を別途行った。

### （４）調査取りまとめ

**①具体的な取り組み**

マスタープラン（取り組み方策）を作成する過程で、島内外の人びとが心の交流を図る「思い出ノート」のアイデアが生まれ、平成20年９月、旅客船ターミナル（沼島）に設置した。

また、本調査は、島内において生活航路と島の活性化を考える契機となり、漁業関

係者、婦人会、小中学校など多様な担い手が参画して島の活性化に取り組む気運を醸成することができた。漁協がこれまで実施してきた稚魚放流のイベント化も、本調査を契機として前向きに進みそうである。あわせて、「ぬぼこの会」と漁業関係者との連携による観光ガイドコースの充実等も期待しうる。

**②中長期的課題**

本調査を通して、休憩イスの設置・トイレ・協力施設の充実などハード面の課題、沼島の活性化を推進する体制、沼島全体が潤う経済的システム、沼島への交通アクセスなど、中長期的課題が抽出された。

**③島内外に向けた取り組みの発信**

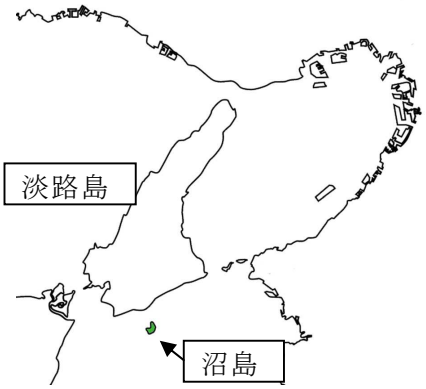
生活航路と島の活性化を目指す沼島モデルの取り組みを島内外に広め、地元での理解促進と“沼島にできることは全国の離島・過疎地域にもできること”とメッセージとエールを送ろうと、神戸市内及び沼島にてシンポジウムと地元報告会（神戸大学が実施している「一日神戸大学」を活用）を開催した。一連の取り組みは、テレビ、新聞等マスメディアにも注目され取り上げられた。

さらに沼島モデルの理解を促進するために、本報告書とは別に沼島モデル紹介の小冊子とＤＶＤ「観光による離島航路の維持と地域づくり　沼島モデル」を作成した。

## ２．沼島の現状

### （１）兵庫県南あわじ市沼島（ぬしま）

淡路島の南方 4.4ｋｍ、紀伊水道に位置する、周囲およそ 10ｋｍの小島で、古事記における国生み神話や古い歴史が伝えられ、豊かな自然に恵まれた漁業で栄えた島である。

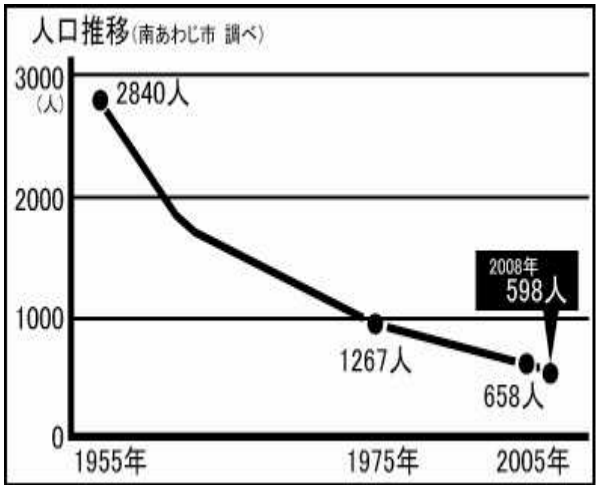



### （２）人口

本調査が始まる平成 20 年 8 月末現在の人口は 598 人。(南あわじ市調べ)

昭和 30 年には 2840 人だったが、減少が続いている。沼島には小学校、中学校はあるが、高校に進学する場合は島外に通学又は寄宿しなければならない。

沼島の児童・生徒数は、平成 20 年 10 月現在で小学生 38 人、中学生 23 人であり、近年出生者数は年 0～数人である。また、60 歳以上が 290 人で全体の約 5 割を占める。




### （３）産業

沼島の主要産業は漁業である。沼島漁業協同組合が昭和 24 年 10 月に設立された。

平成 15 年 4 月、組合員数約 200 人、水揚高 7 億 2 千万円であるが、平成 20 年 3 月、組合員数約 140 人、水揚高 5 億 8 千万円弱と組合員数の減少等が進んでいる。

稚魚放流や産卵床設置による資源確保、海岸清掃活動に取組んでいる。

（４）ぬぼこの会

郷土史を学んでいた島民有志が平成 19 年 3 月に設立した観光ボランティアグループ。会員は 20 人(実働は 7～8 人)、代表者は中川宜昭氏、事務局長が魚谷佳代子氏である。島内散策のガイドを通して郷土の歴史を知ることにより先人の歩みに学び、おのころ神話を語り継ぎ、郷土に誇りをもって生きてもらいたいと、島の未来を担う子供たちにも話をしている。

島内散策のコースは、歴史、景観、自然観察と来訪者ニーズにあわせ、1 時間、2 時間、半日コースを設けている。おのころ神話、郷土の歴史、島の風習等を取り混ぜて島の魅力を伝え、設立した平成 19 年は 823 人のガイドを行い、平成 20 年には 2223 人のガイドを行った。

ガイドの要請は増えているが、後継者の育成や地域全体への拡がりが課題となっている。

（５）沼島総合開発会

昭和 35 年 5 月、沼島地区住民の経済安定と福祉の向上に資するため「沼島総合開発会」が設立された。設立当初は沼島総合開発計画の推進、地区内及び関係団体と連絡調整等を行うことを事業の目的としていた。同会は、地区の各種団体代表からなる委員と町内会選出委員（各町内会から選出された 30 歳代、40 歳代、50 歳代各 1 名）で構成される。

平成 20 年 4 月現在、町内会長、漁業組合長、婦人会長、老人会長、ＰＴＡ会長等に町内会選出者 13 名を加えた総勢 37 名である。事務局は、南あわじ市沼島出張所に設置されている。会として、観光の活動は行っていない。

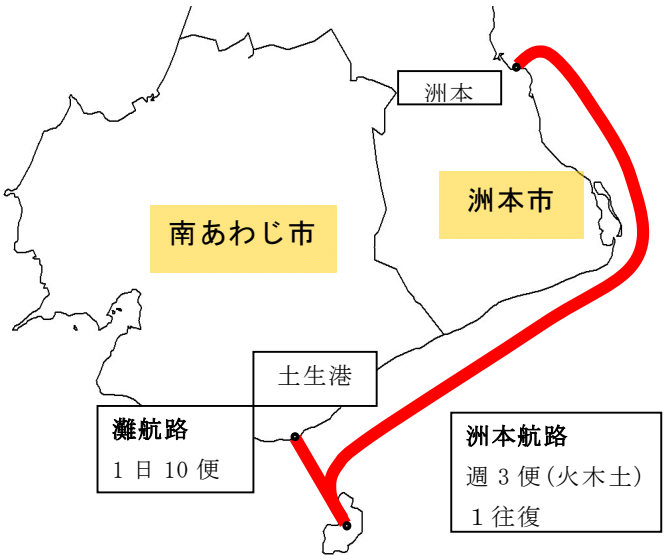
本調査では島内の合意形成を重視するため、同会に「地元部会」への参加を依頼した。

## ３．沼島航路の現状

離島人口の減少・高齢化による輸送人員減・国等の財政事情、さらに近年の原油価格高騰等で、離島航路の事業経営は非常に厳しい状況にある。

沼島と淡路島を結ぶ唯一の交通機関として、人、郵便、生活物資等の輸送を担っている沼島汽船（離島単独航路）は、国の離島航路整備法に基づく離島航路補助と、県、南あわじ市それぞれの離島航路補助を受け運航されている。沼島汽船の航路には、灘航路と洲本航路があり、灘航路（沼島－土生）は、毎日 10 便運航している。洲本航路は、従前毎日 1 便運航していたが、医療機関への通院のための足を確保しつつ、合理化と収支改善を図るため、島民の理解を得ながら、平成 18 年 10 月から週 3 便（火曜日、木曜日、土曜日）となった。（平成 9 年 2 月まで沼島－福良の航路もあった。）

使用船舶は、「しまかぜ」と「しまちどり」の二隻がある。




沼島－土生間の灘航路は、平成 17 年に約 10.9 万人の輸送実績を記録して以降、増加の傾向を示している（平成19年度輸送実績約12.1万人）。島内人口は減少しているので、釣り、島の歴史文化、自然、味覚、海水浴を目的とする来訪者の増加によって、輸送人員が増加傾向にあると航路事業者は分析している。

しかしながら、島内人口の減少、高齢化による島民利用の低下、貨物・手荷物の減少、加えて原油価格の高騰により、経営状況が悪化している。

離島航路補助に関する国土交通省の取り組みとしては、離島航路整備法に基づく補助対象航路に対して、標準的な賃率や経費単価に基づき算定した欠損額を国庫補助しており、地方自治体（兵庫県・南あわじ市）における補助と合わせて経営が維持されている状況にある。

## ４．バリアフリー化の状況

今後の中高年層の旅行需要を見据え、ユニバーサルツーリズムの視点から、島内公共施設及び船舶のバリアフリー化状況を調査した。

沼島及び土生港における旅客ターミナルは、平成 15 年に沼島港側、平成 17 年に土生港側において浮桟橋、発券・待合施設、駐車場、公園など整備がされ、両ターミナルともバリアフリー対応となっている。その他の島内公共施設では、沼島診療所、南あわじ市沼島出張所が、出入口にスロープを設置するなどバリアフリー対応となっている。

沼島汽船の船舶は、二隻中、「しまかぜ」がバリアフリー対応である。高齢者等介助の必要な乗客へは、船員・陸上員がサポートを行っている。

沼島旅客ターミナル（沼島港）入口、扉、浮桟橋

トイレ（沼島旅客ターミナル内）

灘旅客ターミナル（土生港）

沼島診療所

南あわじ市沼島出張所

## ５．提言に向けて

### （１）調査のねらい

国内の一般旅客定期航路の現状は、地域活力の低下等から航路経営が悪化し、平成 12 年度から 19 年度の間に航路の休廃止、縮小により、延べ 14,000km が廃止されている（国土交通省調べ）。

こうした中、沼島に限らず離島航路の事業経営は、離島人口の減少・高齢化により非常に厳しい状況にあるものの、廃止となれば生活交通の確保ができなくなるため、国等の補助によって運営が維持されている。しかし、国等の財政事情もあり、公的支援への依存度を高めることは容易でない。このため、航路の将来を見据えた取り組みの必要性に迫られている。

本調査では、観光で島の魅力を高めることにより航路利用者の増加を目指した。グリーン・ツーリズム、エコ・ツーリズムといったニューツーリズムの動きも、追い風となっている。しかし、単に離島観光のツアーモデルを作ることを調査目的としてしまっては、一時的な交流人口の増加には貢献できるかもしれないが、航路の維持活性化のための持続的な取り組みとならない。

そもそも、航路がなくなる事態となれば島にとって死活問題である。島の元気がなくなれば航路も維持できない。このことを踏まえるならば、航路の維持活性化は地域の維持活性化のなかで捉えなければならない。生活航路と島の活性化の中心となる担い手は島民であり、島ぐるみで取り組むことが重要である。

以上のような認識のもと、本調査は、「観光」を一つの契機として扱うものの、豊かな自然、主要産業、地域コミュニティの結びつきという島の長所を大切に、沼島に暮らす人たち自らが、島の魅力を再発見し、島内外の人たちと世代を超えて、ともに地域づくりに取り組むことの重要性を共有しながら取り組みを進めた。そしてこの重要性は、調査活動・結果からも再認識されたところである。これからも島内外の関係者の協力を得ながらも、島民自らが主体となり、「観光」を活用して戦略的かつ着実に地域活性化を図っていくことが肝要である。

### （２）沼島における観光の現状と取り組み

関西において「沼島」と言われてまず思い浮かぶのは「鱧」。そして鯵、鯛、さらには磯釣り。決してこれだけの島ではないのだが、島外の者が沼島について思い浮かぶ言葉はこのあたりで止まってしまうのが今の現状である。もっとも離島の中にはこのような言葉が連想されることさえないところも少なくないので、その点では沼島は優位にあるとも言える。

沼島における観光の取り組みの現状としては、平成 19 年 3 月に設立された観光ボランティア「ぬぼこの会」の存在が注目に値する。人口減少と高齢化が進み、将来的には島の存立さえも懸念されると、この危機感をばねに、島の将来を担う若者たちに島の魅力、歴史、文化等を伝え残すことと、島の活性化を目指し、同会が中心となり観光による島の活性化に取り組んでいる。沼島の人たち自身が沼島をより良く知ることを願い行われている同会の活動は、来訪者に沼島には美味しい魚だけでなく、自然と多様性のある歴史・文化が残っていることを体験してもらうこと、そしてその活動を通じて自らの地域を少しでも元気にすることに貢献できたら、という思いが込められている。

同会が案内した来訪者は、平成 19 年度 823 人、20 年度は 2223 人である。平成 19 年度の沼島汽船の利用客数（定期券・回数券利用者を除く）が 18 年度と比べて約 2900 人増えた（小人を 0.5 人として大人換算した値）ことに、少なからず貢献している。

（３）沼島モデルの取り組み

本調査では、島民主体で、島の歴史、文化、自然等の魅力を再発見し、また、沼島を訪れる来訪者におもてなしの心が伝わる取り組みを行う「観光による地域づくり」が何よりも重要であるとの考えに基づいている。

そのため、地域のオナーシップ（主体性）を重視し、島に暮らす老若男女が主役となり、行政機関、大学がこれをサポートする体制を組むことに配慮した。即ち、多様な地元関係者(島民、漁協、学校など)の参画と国･地方自治体、交通事業者、地元大学などの共通認識・合意形成に向けた仕組みづくりに留意した。

このようにして「生活者としての住民(島民)」と「地域の産業」等を主役として、「国・地方自治体」、「交通事業者・観光事業者」及び「地域の大学」が支援する体制を整え、「観光を一つの核とする離島における持続的な地域づくり」を通して生活航路と島の活性化を図る方策の検討を進めた。(図 1)

①沼島モデルの調査体制

本調査では主役は島民であり、離島観光では、島の暮らしと観光の調和が特に重要であるとの考えの下、地元関係者（観光ボランティアグループ「ぬぼこの会」、沼島の各種団体の代表で構成される「沼島総合開発会」)、学識経験者、関係行政機関による産学官民からなる委員会を設置した。

また、島内の合意形成を重視するため「地元部会」を設置した。

委員会及び地元部会を、計５回開催し、海事、交通、観光に係る産学官の専門家による講演、指導、現地調査と、地元部会から提案される内容について専門家によるブラッシュアップ（磨きをかける）を行い、これに漁業関係者有志及び学校関係者との意見交換も行って、地元の意見を取り込んだ持続可能な沼島モデルをつくり上げることとした。

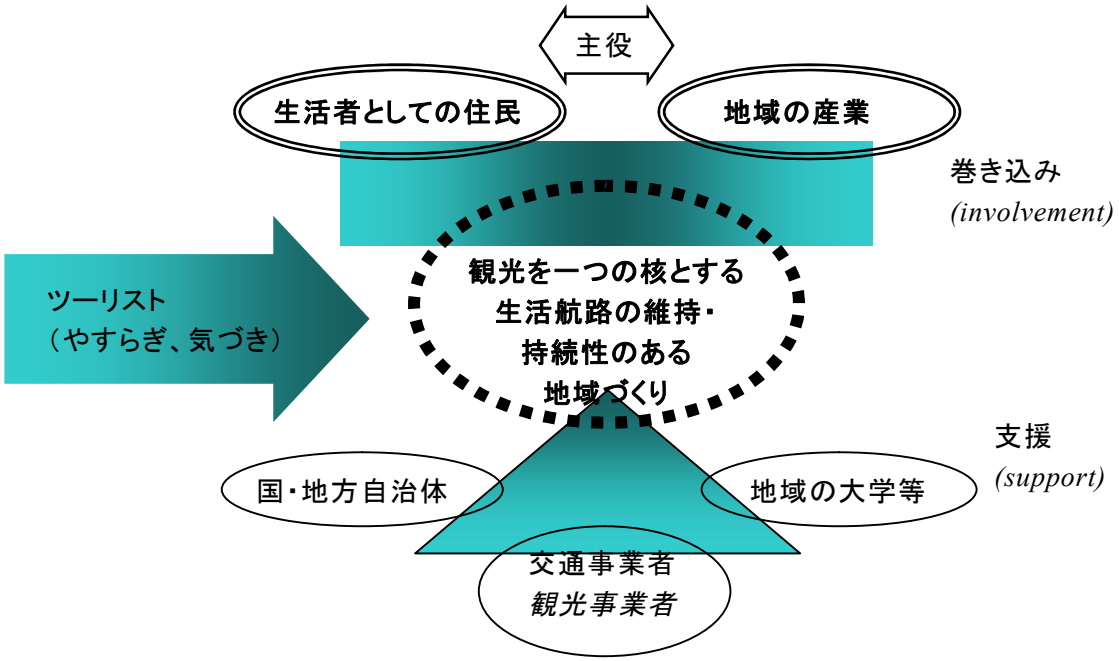



図１　沼島モデルの全体イメージ

②沼島モデルの調査方法

まず、第１回委員会・地元部会では、沼島及び航路の現状等を調査した。離島単独航路である沼島汽船は、沼島と淡路島を結ぶ生活航路であり、島民にとってなくてはならないものであるが、島内人口の減少（平成 20 年９月現在約 600 人）により、島民の利用のみで航路を維持することは困難なため、国等が補助している。しかし、国等の財政事情もあり、将来の航路維持に対して不安を抱える島民も少なくない。そこで、生活航路と島の活性化は、島民自らが主体的に取り組まねばならない課題であることと、観光を活性化に活かすことを共有した。

また、観光に対する取り組み状況と主要産業といえる漁業の現状について、関係委員からの報告と意見交換を行った。

第２回地元部会で、沼島をよく知る外部講師からエコツーリズムについてアドバイスを受け、第２回委員会では陸上及び海上周遊コース体験ツアーを実施し、沼島の持つ観光資源の確認と再評価を行った。来訪者層及び島内の受入れ体制ごとに、課題の抽出を行い、具体的な取り組みをマスタープラン（取り組み方策）にまとめた。

また、課題抽出の過程において、沼島の将来を担う子供たちの観光地域づくりの取り組みと、島の主要産業組織である漁業協同組合（漁業関係者）の積極的な参加期待が高まったため、小中学校関係者と漁業関係者有志との意見交換を別途行い、これらの意見も取り込んだ。

この作成作業の過程は、島内の観光を活用した生活航路と島の活性化に対する島民の期待と不安を共有し合意形成を図る上で、とても重要なプロセスであった。

（４）沼島モデルのポイント

沼島モデルの検討は、「ぬぼこの会」の活動を基に、以下の３つのポイントに留意して行った。沼島に限らず地域観光に取り組む上で重要なポイントである。

①島民主体で取り組む

生活航路を守り、島を活性化する主体は島民自身であり、離島観光（他地域での観光においても、同種の議論が重要となると考えられるが）では、島の暮らしと観光の調和が特に重要となる。すなわち、島民主体で島の歴史、文化、自然等の魅力を再発見し、また、沼島を訪れる旅行者に、おもてなしの心が伝わる取り組みを行う「観光による地域づくり」が何よりも重要であるとの考えがそのエッセンスと言える。

本調査においても、地域のオナーシップ（主体性）を重視し、島に暮らす老若男女が主役となり、行政機関、大学がこれをサポートする体制を組むことに配慮した。そのため委員会に加え「地元部会」を設置し、①誰に来てもらい、②何を観て（体験して）・感じてもらい、③島民は、何を守り伝えたいのか、を島民主体で考えてもらう体制を整え、島全体で観光に取り組む気運を醸成することに配慮した。

②島の観光資源を把握する、資源を商品に磨き上げる

費用と時間をかけて旅行者は沼島を観光に訪れるわけであるから、そこで心地良い体験（時間消費）と思い出（記憶の中だけではなく、凝縮される事物とともに）を持って帰らせることができなければ、リピーターや口コミの広がりを獲得することはできない。他の離島観光と差別化を図り、リピーターを獲得するためには、もてなす側は、素朴さの中にも決しておざなりでないおもてなしをせねばならず、島民の目線で

素晴らしいと思う、島内のヒト、モノ、自然といった、あらゆる資源を観光の観点から把握し、資源を商品に磨き上げることが重要となる。それは決して、ないものねだりの作業ではなく、あるもの探しの活動となる。

この点、通常思い浮かぶ歴史、街並み、自然等具体的に目に付きやすいものだけが、観光の中核的商品ではない。これらは観光行動の対象としてわかりやすい対象物ではあり、ガイドブック等に記載しやすいという点で重要なものであるが、来訪者が消費するのはこれら対象物そのものではなく、その対象物を介した各種の体験であり、時間である。従って、建造物とか自然といったわかりやすい対象物にとらわれすぎることは避けなければならない。

人びとが旅をする基本には、日常生活において日々体験していることと異なる体験を求めることがある。従って、観光地の魅力のルーツは「非日常」にあるということさえ言える。ただ、ここに言う「非日常」とは、何か特異なものと短絡的に解釈してはならない。重要なのは、当地に住む者にとっての日常が、他の生活圏に住む者には魅力的に映る「非日常」である可能性があるからである。例えば、沼島の場合、島の何気ない自然・空間には、人びとに自らの内面を見つめ直す貴重な雰囲気を醸し出す側面がある。このような、可視化し難いものも新鮮な体験となりうる。これは一例に過ぎないが、「商品」として磨く価値のある体験は幅広く在る。

最後に、どのようなものが魅力的かを判断する上で、島外に住む者、来訪者といった外部の意見・感想が貴重な情報源となるが、その情報が常に正しいとは限らない。通常、人は自分の経験の延長でしか欲しいものを主張することが出来ないため、想像の範囲を超えた、全く新しい素晴らしいものを欲しいものとして表現することはできない。従って、外部の意見・感想を把握し、取り組みに活かしつつも、島民の主体性、戦略を持つことを忘れてはならない。

**③生活航路の維持活性化と持続可能な観光を実現する**

１回限りのイベント、一過性のブームではない持続可能な観光を通して島の元気を取り戻すためには、島民が主体的に議論を重ね、思いを共有し、取り組みを継続していくことが重要である。そして継続には次の６点が重要である。① 無理せず、島民自身ができることを、自らも楽しみ行うものでなければ取り組みは持続しない。大げさなこと、特別なことではなく、誰もが現状から少しの努力でできる日常的なことへ、その戦略を具体的に落とし込むことが非常に重要である。そのためには、②担い手・協力者を確保し、役割分担することが重要である。そうすれば一人一人のなすべきことが大ごとではなくなるだろう。

このように島全体としての取り組む体制を構築・維持するためには、③特定の人物、事業者だけが利益を得るのではなく、島全体で皆が利益を享受していくシステムになることが大切になる。そして、④無償奉仕のみに頼る観光は継続しづらい。素朴さの中にもプロのおもてなしをする心構えを継続的に持たせるためにも、島のため汗を流す者へは感謝と奉仕に対する報酬（対価）も必要である。

⑤島全体に無理がかからない範囲を考える議論と、現状を何も変えようとしない消極的議論を峻別することが肝要である。さらに⑥観光のマイナス面（住環境、自然環境等への影響）が全くないわけではないことも理解し、情報共有を図りながらマイナス面を克服するための方策を同時に議論する必要がある。

生活航路の維持に関して、航路事業者の概算によると、航路運賃による費用の回収

率を考えた場合、赤字を解消するためには、輸送人員（平成 19 年度約 12 万人）を約２倍にしなければならない。倍増する 12 万人を交流人口の増加だけで達成しようとすれば、毎日、島の人口の２分の１以上の来訪者を必要とすることになる。同程度の来訪者を週末（土日）のみで受入れようとすれば、毎週末、島の人口の約２倍もの来訪者が必要となる。季節変動を考慮すれば、例えば、鱧のシーズンには、さらに大量の来訪者を島に受入れることになる。このような状況では、来訪者の存在が島の脅威となることが容易に想像でき、生活航路の維持活性化と持続可能な観光の実現という考え方と両立しない。

このように採算原理だけで航路維持を議論することは難しく、国土の均衡ある発展の観点から、沼島において航路を維持するには何らかの補助金投入は避けられないとも言える。

このことから明らかなのは、経常赤字の解消を一気に達成しようとする、おそらく一時的に終わる乗客増加策の検討ではなく、持続可能な観光の地域体制づくりと、その結果としての来訪者増に伴う航路欠損額の減少基調の構築を目指すべきということである。持続可能な観光の体制が整う中で、地域づくりが進み、島が賑わい、さらに島に人が戻ってくれば島民による航路利用者も増加することは言うまでもない。あわせて交流人口の増加は、沼島航路支援のために自ら納付した税金の一部が補助金として使われ、島の暮らしが支えられていることを知ってもらう契機ともなりうる。

## ６．提言

地元部会を中心に作成したマスタープラン（取り組み方策）は別表に示すとおりである。そこに共通する重要なポイントは、沼島のすばらしさを分かってもらえる人たちに、心地良い時間を沼島で体験してもらうためには何が必要か、まずはどこから手をつければ良いかという点を明らかにしたことにある。

### 当面の課題

**（１）「ぬぼこの会」活動の負担軽減**

「ぬぼこの会」の活動の持続的発展には、まず島内及び淡路島本島の関係者と連携した沼島来訪者の受け入れ窓口の充実が必要である。ガイドメニュー（コース、内容、時間等）の充実も必要である。歴史の解説に加え、漁業関係者の話を聞く機会等、地元の人びととのふれ合いを組み込むことで、ガイドスタッフの負担軽減が図れる。あるいは来訪者に静かに自分の心を見つめ直す時間を提供するメニューなど、来訪者のニーズに合った案内メニューの充実に取り組むことも重要である。本調査を通して、価格、滞在時間といった通常まず想定される選択要因に続いて、食事が重要なポイントして抽出された。このことからも沼島においては、食事・魚をいかに活かすかが魅力あるツアーづくりにとって重要になる。無理をせず、できることから関係者の連携を強化して取り組むことが期待される。

**（２）漁業を観光資源として活かすために**

漁業体験以外に、稚魚放流も、年齢を問わず来訪者にとって関心を呼ぶイベントとして育てることができる。さらに魚介類の販売やこれを支える生産体制についても取り組むことで、地域産業の活性化を図り、このような活動を通じて、沼島の地域づくりの取り組みを島内で共有することが期待される。

**（３）おもてなし充実の取り組み**

「ぬぼこの会」には、出会った島民からの挨拶が嬉しかったという感想が届いている。来訪者に対して自分の方から気さくに声をかける島の人たちが増えると、来訪者に良い印象を与えるとともに、取り組みに対する雰囲気も前向きになる。

また、島の子どもたちの歴史、文化等の学習成果を、島民と旅行者が行き交う沼島港・土生港両ターミナルにおいて見ることができるようにすることで、ターミナルが来訪者に島の暮らしと島民の気持ちを伝える場所となる。

他方、平成20年９月、沼島ターミナルに「思い出ノート」を設置した。来訪者に沼島観光の思い出を気軽につづってもらい、島民はノートを見ることで来訪者の沼島に対する想いを知ることができる。

**（４）子供（小・中学生）**

島内の小・中学生については、島の歴史、文化等の学習活動の発信や、島外の学校や来訪者との交流を通した地域参加が可能である。

「ぬぼこの会」、漁業関係者との連携も重要である。そしてこれらの活動成果を、ホームページなどを活用して全国に情報発信すると共に、人びとに新たな知を提供する場を設ける（沼島港・土生港両ターミナルを利用して展示する等）ことでその輪を拡大することも可能となる。

（５）外部人材の活用
　持続的発展のためには、島内に加え島外の協力者も必要である。多様な局面で島内外の人材の活用を図るよう配慮する必要がある。

（６）安全・安心確保のために
　安全・安心を確保するためにも、活動中の安全管理、マニュアル、救急体制を整備し、保険加入等の検討も必要である。さらに、「ぬぼこの会」の活動で受け入れることのできる旅行者の限界を見定め、とくにピーク時における来訪者数を積極的にコントロールできる方策の確立も、中長期的な課題となるが必要となるだろう。

（７）釣り客
　磯釣りのための来訪者に対しては、マナーの悪い行いがしづらい雰囲気づくりが必要である。

## 中長期的課題

（１）沼島の観光を担っていく体制
　島民を主体とする推進体制の構築が今後の課題である。また情報発信については、南あわじ市のホームページや観光協会のサイトを活用した沼島のポータルサイトの形成も有益である。

（２）沼島全体が潤う経済的システム
　増加した来訪者が、乗船料(と駐車料金)以外に、島でお金を気持ちよく使える施設、商品等の仕掛けも重要である。それは単に島の経済活動の活性化を図るためだけではなく、観光をキーワードにした地域づくりへの参加者を増やすため、そして来訪者に思い出を持ち帰ってもらうためにも検討して良い課題である。

（３）沼島への交通アクセス
　安心して、気軽に訪問してもらう上で、アクセスの向上は重要な課題の一つである。神戸市内から公共交通で沼島へ行く場合、三ノ宮から高速バスで福良に向かい、さらにコミュニティバスに乗らなければならない。片道２時間を超えるため、実際の距離以上の負担を感じ、自家用車かツアーバスの利用者以外の来訪を逃しているかもしれない。
　そこで、例えば、洲本、福良のホテル等と連携して、ホテル等での宿泊と「ぬぼこの会」ガイドが連動したツアーを設けることができれば、ホテルから送迎バスで沼島に行くことができ、淡路島全体の活性化と沼島への交通アクセスの課題を補う余地が生まれる。

（４）離島航路補助
　現行の補助制度は必ずしも事業者の増収努力と両立する補助制度となっていないとの声もあり、国土交通省海事局を中心に、航路事業者に対するインセンティブ等の検討が行われている。

## マスタープラン（取り組み方策）

| 島来訪者 | 現状 （これまでの取組み） | 課題 |
|---|---|---|
| 小学校 | **自然体験**<br>六甲山小学校（沼島小との相互交流）<br>（校長が沼島YMCAのOB）<br>・毎年10名程度の児童が来島<br>・総合センター（宿泊）木村屋（風呂）<br>あさやま（食事）で分担。<br><br>**19年度**<br>淡路島内小学5年生が自然学校で<br>10校来島 | ①宿泊施設<br>・沼島の宿泊施設は小規模。淡路島のホテルは観光客がメイン。<br>・青年の家の活用（収容人員の制約）<br><br>②休憩所<br>来訪者が増えた場合、休憩所、銭湯、シャワー設備が不足。<br><br>③島の主要産業である漁業を活かした体験型観光など、子ども向けコンテンツの発掘(体験型・天候に左右されない) |
| 個人客<br>・団体客 | **ぬぼこの会関係**<br><br>ボランティア活動（常時活動5～6名）<br>・時間とニーズに対応した5つのガイドコースがある。 | ①コースの充実<br>沼島での滞在時間と好みに合わせたコースの充実<br>（沼島の地域資源を活用した観光モデル）<br><br>②島内外に「ぬぼこの会」の志を広める。<br><br>③ぬぼこの会のメンバーの協力者確保<br>（個人への負担→多様な担い手）<br><br>④ボランティア活動に対するリスク管理<br><br>⑤沼島庭園の維持、コース整備(安全面、植生) |

※枠内の【関係者】表記について。
関係者として記載された方々に対して、責任を負わせるものではなく、
今後のフォローアップ上の整理をしたものである。

| 課題に対して現在取り組んでいること | これから取り組めること | 中長期の課題 |
|---|---|---|
| ①沼島総合センターの活用(宿泊可能、土日トイレ使用可能) | | ①国等の制度活用による宿泊施設の充実 |
| ②総合センター(トイレ)、木村屋(風呂)、神宮寺(休憩)の利用 | ②総合学習で作成した資料を島外の小学校に提供し、沼島への関心を高め来島を促す。<br>【関係者:小学校】 | ②休憩イスの設置、協力施設の充実 |
| ③漁業関係者有志と意見交換<br>(H20.10.31) | ③ぬぼこの会、漁業関係者など地域連携 | |
| ① 神戸大学学生グループによる分析<br>(H20. 10. 9現地調査)<br>(H20. 10. 21現地調査)<br>(H21. 1. 29発表) | ①漁業関係者有志との連携によるコースの充実<br>【関係者:ぬぼこの会、漁業関係者】 | ①旅行社の能動的活用 |
| ②思い出ノート<br>沼島のターミナルに、来訪者が気軽に書き込めるノートを設置。<br>沼島観光の思い出をつづってもらう。<br>島民はノートを見ることで、来訪者の沼島に対する想いを知ることができる。<br>(H20. 9月「思い出ノート」を沼島のターミナルに設置)<br>②島全体でおもてなしの挨拶に取り組んでいる | ②沼島の地域づくりの取り組みを島内で共有(島全体) | |
| | | ③学生など外部人材の活用<br>③ガイド料徴収<br>→会活動協力金の徴収(沼島庭園維持費用やお小遣い、勉強会費用に充当) |
| | ④活動中の安全管理・マニュアル・救急体制<br>④管理者賠償責任保険への加入<br>【関係者:ぬぼこの会など】 | ④観光まちづくり事業体制度(仮称)の活用 |
| ⑤島全体の魅力を白地図に記載(安全・安心箇所点検)<br>【関係者:南あわじ市など】 | | ⑤学生など外部人材の活用<br>⑤ガイド料徴収<br>→会活動協力金の徴収(沼島庭園維持費用やお小遣い、勉強会費用に充当)<br>⑤植生調査 |

| 島来訪者 | 現状 （これまでの取組み） | 課題 |
| --- | --- | --- |
| 個人客<br>・団体客 | **漁業関係**<br>①焼き鯵の試食会<br>過去の試食会ではニーズあり<br>②鮮魚の直販<br>③干物の販売（鮮魚は仲買人扱い） | ①保健所の衛生指導<br>②仲買人資格が必要<br>③冬季のみ天然天日干し（冷凍庫900kgの保管期間は2～3ヶ月） |
| | **漁業関係**<br>④稚魚放流、漁場再生<br>・毎年オコゼ、ヒラメ、マダイ、キジハタの稚魚放流<br>・漁で水揚げされた稚魚のリリース<br>・アオリイカの産卵場所を設置 | ④地域の取り組みのイベント化 |
| | **学校関係**<br>沼島の小中学校では、沼島の歴史・自然・産業について、調査活動をしている。<br>①中学校では「沼島を知る活動」をしている（10年以上）<br>・冊子をターミナルに設置。<br>・中学校HPにて詳細を掲載している。<br>②小学校では和太鼓を練習し、5月の夏祭り・11月の学習発表会で披露している。 | 子どもたちの地域参加 |
| | **周遊関係**<br>①沼島汽船<br>②漁業関係者<br>・船舶、保険等の理由から実績なし。<br>・PTAによる沼島小中学生の漁業体験は実績あり。 | ①沼島汽船による定期周遊は法的制限がある。<br>②船舶、保険等 |
| 釣り客 | 磯釣り客は、沼島汽船を利用するが、船釣り客は沼島汽船を利用しない。（但し、磯釣り客の方が多い） | 環境を守るマナー<br>・波止釣り、磯釣りの入漁料徴収を過去に試みたが人件費等で止めた。<br>・強制徴収には法的検討が必要、現実的でない。徴収するとしても環境美化協力金などソフトなアプローチが穏当。 |

| 課題に対して現在取り組んでいること | これから取り組めること | 中長期の課題 |
| --- | --- | --- |
| | 無理せずできることから検討 | |
| | ④イベント化を検討中<br>【関係者：漁業関係者など】 | |
| 小中学校校長・教頭との意見交換<br>（H20.10.31） | ・「沼島を知る活動」（総合学習）、<br>卒業制作など学校活動との連携。<br>【関係者：小中学校】<br>・沼島ターミナル等での来訪客に対する<br>情報提供スペースの確保。<br>【関係者：南あわじ市・沼島汽船<br>・小中学校】 | |
| ①海上周遊体験ツアー（社会実験）<br>（H20.10.9） | 無理せずできることから検討 | 海上と陸上が満喫できる取り組み<br>の充実など、旅行社の能動的活用 |
| | マナー違反のできない雰囲気づくり<br>（島全体） | |

## ７．シンポジウム（神戸）、報告会（沼島）概要

生活航路と島の活性化を目指す沼島モデルの取り組みを島内外に広め、地元での理解促進と、“沼島にできることは全国の離島・過疎地域にもできること”とメッセージとエールを送ろうと、神戸市と沼島にてシンポジウムと報告会（神戸大学が実施している「一日神戸大学」を活用）を開催した。テレビ・新聞等マスメディアにも注目され取り上げられた。

### （１）「沼島モデル」シンポジウム

平成 21 年 1 月 29 日（木）13：30～16：30、85 名の参加のもと神戸市勤労会館会議室で開催した。

沼島について初めて話を聞く人もいるので、先ず沼島の概要を理解してもらうために、今回の調査記録も兼ねる沼島モデル紹介ビデオを上映した。この後正司健一委員長（神戸大学大学院　経営学研究科教授）から沼島モデルの発表を行い、次いで平田進也氏（日本旅行西日本営業本部チーフマネージャー）が「選ばれる観光地とは？」と題し基調講演を行った。

パネルディスカッションの詳細内容については、以下の記録を参照されたい。

〈パネルディスカッション〉

＊ 沼島観光が定着するために何が必要か
＊ 観光と地域社会の調和のために
＊ 全体の調整役
＊ 沼島から発信できること

〈パネリスト〉　中川 宜昭氏　（委員　「ぬぼこの会」代表／神宮寺住職）
平田 進也氏　（日本旅行 西日本営業本部チーフマネージャー）
正司 健一氏　（委員長　神戸大学大学院 経営学研究科教授）
朝倉 康夫氏　（委員　神戸大学大学院 工学研究科教授）
伊藤 政美氏　（委員　神戸運輸監理部 総務企画部企画課長）
〈コーディネーター〉富田 昌宏氏　（委員　神戸大学 経済経営研究所教授）

（左から、中川、平田、正司、朝倉、伊藤、富田の各氏）

○　コーディネーター（富田昌宏）

本日のパネルディスカッションで、コーディネーターを仰せつかりました神戸大学経済経営研究所の富田でございます。どうかよろしくお願い申し上げます。

まず最初に、このパネルディスカッションの進め方について、若干ご説明させていただきます。正司委員長から沼島モデル、あるいは平田さんから沼島観光というものに光を当てるにはどうすればいいかというような基調講演等をいただきましたけれども、これからのパネルにおきましては、まず、次のような４つぐらいの視点を考えております。

これは平田さんにもご指摘いただいたことでございますけれども、沼島観光が定着するためにはどういったことが必要なんであろうか。あるいは、観光というのは光だけではなしに、やはり影の部分もあるので、そういったものをできるだけ少なくするように地域社会とうまく調和するにはどうすればいいのか。

さらには、こういったことが始まっても、その光がすぐに消えてしまったんでは困りますので、それが引き続き光が当てられ続けるような、そういうような今後の調整役といいますか、進行役といいますか、そういう組織というものはどういったものが考えられるんであろうか。

あるいは最後に、この沼島からどういったことを全国に発信できるのか。沼島の離島振興のために多くの方に来ていただく。そういったことでいろんな方が考えたこと、実践してきたこと、そういったことが果たして日本全国に発信する場合に、どういったところが共通点として考えられるのか。あるいは、こういったところは、やはりそれぞれの地域で違うんではないか。そういうようなことを踏まえながら各先生に、これから最初にお話できなかった方には大体１０分ぐらい、そして最初にお話いただいた方には５分ぐらい、５人のパネリストの方にお話をいただいて、それを受けて相互の意見交換というような意味を含めましてディスカッションをさせていただき、そしてきょうお越しの皆さん方から先ほどのご報告でも、あるいはこれからのパネリストの発言においてもいろいろ質問したり、こういったことを聞きたいということがおありであろうと思いますし、あるいはこんなことをもっと議論したらいいんではないかというようなご示唆があるかもしれません。そういったことをちょうだいする時間を取りたいと思います。

そういうような形で、これから４時半というゴールを目指しまして、パネルディスカッションを進めてまいりますので、どうかよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

それでは、まず最初に、神宮寺の住職でもいらっしゃいます中川宜昭さんからお話をいただくことにいたします。それでは中川さん、よろしくお願い申し上げます。

○　中川宜昭委員

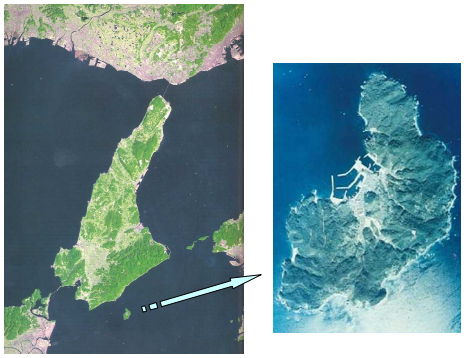
それでは失礼いたします。紹介をいただきました中川です。平田さんが熱く語った後、話をするのはちょっとしんどいんやけど、時間が１０分間ということで。

平田さんは先ほどカリスマ添乗員と、私たちから見てますと何か非常に計算された、そんなことを言うと卑近な例で申しわけないんですが、金が中心になって動いてるような感じがするわけですが、ずっと聞いてますと、結局はやっぱり人間の心の問題やと思いますね。

私たちはこの島に生まれ、この島に育って、人生あともう少しなんですけども、自分たちの島のよさを知ってもらって、そこに少しお客さんを迎えて、そしてやっぱり一番見えてないといいますか、人間の一番近くにあって、実は一番見えてない自分の心と向き合ってもらえるような、そういう場所にしたいという願いを持ってます。

だから、確かにいろんなところを見てもらいたいんですが、実は一番見てもらいたいのは自分の心やと思いますね。沼島が癒しの空間になってもらえるというか、それでまた再び自分を取り戻しにやってきてくれる、そういう島にしたいという願いを持ってます。先ほどずっと前半に紹介があったわけですが、じゃあ自分たちの心をのぞくために、やっぱり少しは色づけをせないかんわけですので、島の魅力というものについて話します。

この淡路島と阪神間と全く違うのは、地理的に言いますと、ここに紀ノ川が走っておりまして、そして吉野川が走ってます。ここに大きな日本の裂け目がありまして、日本構造線というのが走ってます。たったここ１０分なんですけれども、この１０分の間に１億年ぐらい、地質学的に全く違った地層に入っていくわけですね。だから、こういうところの１０分の中でタイムスリップをして、そして１億年の世代に入ってくるという、そういう思いをどこかで伝えられて、島を見てもらいたいという感じがします。



「中川住職提供」

あとは時間がないので走ります。これが１億年の皺と。ちょうど私とこの本堂に神戸大学の先生が泊まったときに、島を歩いて、この鞘状褶曲というんですか、フランスとカナダで発見された、沼島とこの３カ所が、世界の中で、この褶曲が出たとこがあるというので、こういう地理的に、非常に地質学的に違った世界にあるわけですね。

1億年前の地球の「しわ」

淡路で世界有数
褶形褶曲を発見

神戸大助教授 地殻変動の痕跡くっきり

「中川住職提供」

あとは、もう立神の景観なんですが、これは３０メートルあるわけです。先ほど平田さんが非常に景観としてすばらしいと言ってくれたんですが、これは我々地元の者としては立神さんと言うて、１つはもう信仰の対象のようなもんで崇めている岩礁です。

先ほどのが上立神、これが下立神の写真なんですが、実は、ここからこの上側が落ちてしまって、今残っているのはこの景観だけしか残ってないんですが、このリング状に穴の開いたところが上立神・男性神、これが下立神・女性神という感じで、古事記の神話を継承した景観なんですね。

「中川住職提供」

実は、この立神さんというのは、お伊勢さんの信仰のように夫婦岩につながっていくような信仰ですね、日本人の心の現風景の中にある自然崇拝という、その中につながっていく思想があるわけですが、きょうはもう時間がないんで、次へいってもらいます。

これが裏側の、立神の反対側にあるカブト岩、カブト岩と言ってるんですが、こちらは国生み神話の舞台で千畳敷と言う。ここには古代の人たちが平バエ祭りというので陣を張って、ここで祭壇をした跡があります。

そして屏風岩、仏堂とも言われとるが、この景観がすごいんですね。ここではいわゆる地下４０キロから押し上げられて出てきたもの、岩礁が非常に高い水と高い圧力によって非常に険しい岩肌を見せてくれてます。ここには天然記念物の鵜が北から今やって来て、鵜の自然の棲息地の南限だと言われて、天然記念物の場所があ

るわけですね。

屏風岩

穴口

「中川住職提供」

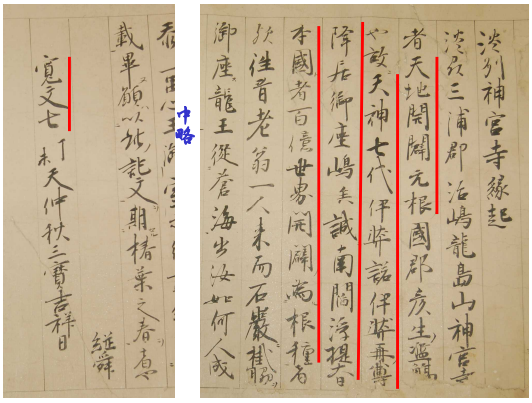
これは昔は沼島を回るときに岩を見るのと、松を見て回ってたんですね、文人墨客たちが。これは唯一、松くい虫にやられずに残っている、これは弁天さんの松なんです。実は、こういう太い松が岩の上に出て、そして太平洋の波に洗われた岩礁のところに伸びてたんですが、もう全部と言っていいほど古い松は枯れてしまいました。これは私たちが、ボランティアグループで案内をしてるところなんです。

古事記の話をしていくと何でそれじゃ淡路が、国生み神話というのは日本の国がどうやってできてきたかという古事記があるんですが、６７４年に壬申の乱の後、大友皇子と大海人皇子の後の壬申の乱の後、古事記の編さんになるわけですが、古事記がなぜ淡路からスタートしてるのかという問題があるわけですね。

私も大学時代に国文で古事記をやったわけですが、その文書の古事記の内容云々よりも、なぜ淡路から古事記がスタートしてるのかという、そのことには非常に大きな歴史の隠された部分があるわけで、それがおもしろいんですね。

実はこの間から新聞をにぎわしておりますが、淡路で一番大きな、日本でこれだけ大きな鉄の精錬所の跡が発見されてますが、淡路島というのは実は鉄文化を持ってきた背景があるわけでして、その背景と実はこの古事記の国生み神話というのが、非常に密接につながっておもしろいもんがあるわけですが、その話をやると大体１時間ぐらいかかりますので、もうやめます。

実は、これは寛文７年に、私とこの神宮寺の縁起があるわけですが、そのところにこういうくだりがあります。沼島龍島山神宮寺という、天地開闢元根の国なりと、こういう形ですね。天地開闢、天と地が開けた最初の元根という、こういう表現をしてます。そして、さらにずっと見て、神代七代というんですが、イザナギ、イザナミ尊までいく七代の神々の、その後にイザナギとイザナが降居御座島、お座りになった島だというふうな表示が出てきます。




「中川住職提供」

それからずっときて、大日本国百億世界開闢根種なりと。根種、こういう根っこの種ということが出てきます。世界開闢、世界が開かれた最初の根っこになった島だということで、ずっとあと文書がきて寛文７　・舜、この方のお墓もありますから、これは勝手に現在書いたものじゃなくて、寛文７年。今はいろいろ淡路のおのころ島伝説というのは、いろいろなところで言われてますが、非常に現代的な解釈で、現代的な資料しかないわけですが、ここへ寛文７年、・舜（ｹｲｼｭﾝ）という、この方の名前の記録がある。

もう１本、正徳２年という神宮寺の縁起には、もう少し詳しくいろいろ出ておりますが、これは漢文体で書いてますが、漢字仮名まじり文です。

棒状石器

「中川住職提供」

１５分になりました。こんな話をしよるとあれなんで、これが鉄文化につながっていくアマ族たちと言われております。これは沼島だけじゃないんですが、鉄文化を持ってやって来た者たちが通った跡に残されたもんです。

それから歴史を知ってもらうために、これは中尊寺にあった、頼朝の政権を支えた、鎌倉幕府を支えた、政権を支えた梶原景時の子孫たちが、この神宮寺へ持ってきた。今、国宝に全部なっとるわけですが、これは重要文化財として残ってます。

「中川住職提供」

ということで、こういう歴史遺産があるわけですね。沼島へ渡って来ていただいたときに何もないんですが、何もないところなんですけども、過去の先人たちが非常に国際的に動いた足跡が見えます。そういうことを感じながらあの空間の中で、言ったように自分を取り戻してもらいたい、そういう島にしたい。そういう島に渡って来る人たちと一緒に、この我々が住んでいる島に残った者たちも、自分たちの活力を取り戻しながらできれば、産地直産の形で漁業組合等の人たちが魚を食べてもらって、地域の経済の活性化につながっていけたらと思うんですが、ちょっと時間がオーバーしますので、これぐらいで終わらせていただきます。ありがとうございました。

○ コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

それでは引き続きまして、国土交通省神戸運輸監理部総務企画部企画課長でいらっしゃる伊藤政美さんに、お話いただくことにいたします。

○ 伊藤政美委員

国土交通省の神戸運輸監理部の伊藤です。今日は皆さんお越しいただいてありがとうございます。

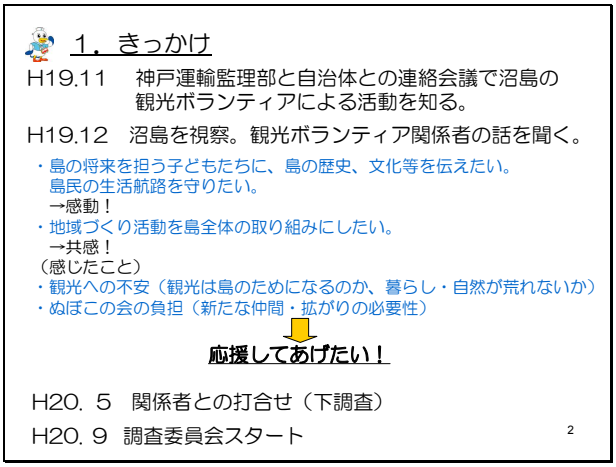
まず私、２つの理由で緊張しています。なぜ緊張してるかというと、旅行会社のプロである、平田さんからこれまでの取り組みにダメ出しを受けたらどうしようと思って、平田さんの講演を拝聴して、これから説明します資料のコンセプトがプロの平田さんにも見てもらえる中身でよかったと、本当にそう思いました。

そしてもう１つ、これは一番のプレッシャーです。沼島から今日きょうは３０人ぐらいの方が来てくれているのです。適当なことはできません。本当に今回の取り組みはスタートからそうでした。本当にど真剣に取り組みました。そして、今日のシンポジウムがある意味、私の中での卒業試験という気持ちで臨みましたが、さきほど中川委員から、まだ卒業するのは早いとお話がありましたので、これからも引き続き沼島の応援団でありたいと思っています。

今日は、もう沼島の皆さんとは話が、タコぐらいに一緒に共有してきた話ではありますが、シンポジウムで初めて耳にする方もいるので、おさらいということで、

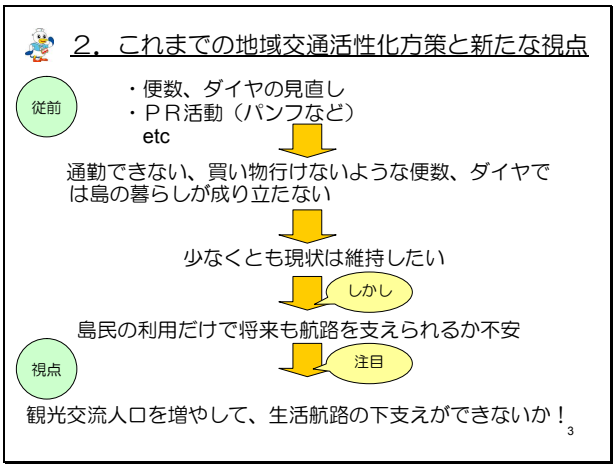
どういうコンセプトのもとプロジェクトに取り組んできたのかということを簡単に話したいと思います。

今日も議論の中で出ていましたが、このプロジェクトのきっかけは、魚谷さんと私の出会いでありました。魚谷さんから、この観光のボランティアの話、単に観光ガイドをしてるのではなく島の未来を担う子供たちに伝えたいものがあるのだということと、島の航路を守りたいという、そういう思いに私は本当に感動しました。そして、こういう取り組みを地域に少しでも広げたいんだという気持ちを感じました、共感しました。




そして、その一方で私は、２つ心配を持ちました。これから観光で頑張ろうとする沼島。観光、良いところもあれば悪いところもあると。観光をせっかく頑張ったのに島がよくならなかったら、島の暮らしが荒れた、自然が荒れた、それでは困る。これは沼島の人たち皆が心配することであろうと。

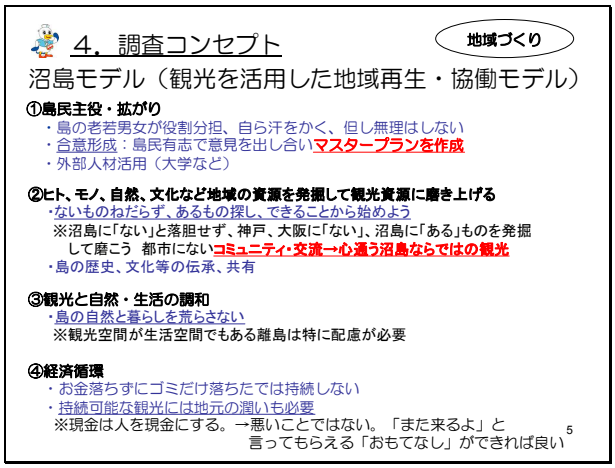
そしてもう１つが、やはり「ぬぼこの会」の負担というのが気になりました。魚谷さんは一生懸命に頑張ってると、ほかのメンバーの方も一生懸命に頑張ってる。でも、その少人数でフル回転で一生懸命に頑張ってたら、さすがにしんどいと。少しでも広がりを、こういう取り組みをきっかけとしてできないかというのが、私の考えたこの沼島モデルでした。




これまでの航路活性化事業はというと、大抵は便数をいじるとか、ダイヤをいじるものでした。しかし、沼島の人たちが望んでいるのは、便数が減っても残ればいいとかそういう話ではないと、少なくとも現状維持だと。そして単に航路の活性化

だけじゃなくて、地域全体が生き生きする。そういうものにならなかったら、今回の取り組みはだめだと考えました。そこで今回は観光というものを「ぬぼこの会」が一生懸命、取り組んで一歩を築いた島の観光を生活航路に活かそう、それをうまく活かして地域協働モデルを作りたいということで始めたのが、今回の取り組みです。

調査のコンセプト、いわゆる拠って立つ基本原則というのを、自分でつくりました。途中でも常に基本に返ろう、基本に返って基本からズレが生じてないか、中川さんの気持ち、魚谷さんの気持ち、沼島の人たちの気持ちをくんだ形で進めてるかどうか。常に基本に帰るということで、４つの基本を立てました。




１個は、島民が主役、それをうまくサポートする取り組みになっているかどうか。特に観光で盛り上がるところというのは、性急に急ぎ過ぎると必ず、地域観光は皆手探りでやります、つまずきます。つまずいたときに、あっ、あのときおれは反対していたんだと地域に不協和音が生まれる、これでは地域が乱れてしまいます。そのため時間がかかってもいい。ある意味、役人の立場からは、単年度でどういう成果を出したかが問われるのですが、私は割り切りました。これはもう５年、１０年たったときに、あのときに伊藤がやっとったと言えば、短期でおまえ査定ゼロと言われてもいいと、そういう割り切りで今回は進めました。そして皆さん、資料で配っている１枚紙の中に、皆ですぐできることって何だろう、中長期、長い目で見たらこんなことをやってみたいなということを整理した１枚紙を、皆で時間をかけてつくり上げました。

そして２番目です。いわゆる沼島、ディズニーランドがあるわけでもなければ、大きな美術館があるわけでもない。だけど沼島に「ない」って考えないで、神戸や大阪に「ない」ものを、神戸や大阪にいる人たちは沼島に期待して来るのだから、そういう視点で沼島に「ある」ものを探しましょうということで、今日も映像にも出てきました。１００メートルもない道路、これは聞いたら、えっ、そうなんだとちょっとした感動が生まれます。また、家と家のすき間を抜けていったら海が見えるような景色も感動です。こういうもの１つ１つを拾って小さな小さな感動を積み上げれば、大きな感動になるではないですかというところで進めました。

そして自然と生活の調和、今までも議論があったところです。島の人たちが暮らしに困っちゃうような観光をしちゃいけない、それがもう大原則でした。経済面の話、長続きという面では、沼島の観光はみな観光の島にしたくて、お金儲けしたいわけじゃない、それはもう基本。その上でみんなが取り組みやすい、ちょっと循環

するぐらいの小さな経済循環というところで、４番目、おまけでつけたところでした。

さあ、今までの話というのが、これまでの委員会でもした話です。沼島の皆さんとすぐできることということで、思い出ノートを島のターミナルに置きました。今日はせっかく皆さんに来ていただいているんで、私をはじめ監理部の人間で、これから今までにない議論、何かできないかな。せっかく平田さんも来てる。素人ながら沼島観光のアイデア、たたき台というのをつくってみました。

カモメの絵がついてる「パネルディスカッション資料２」というのがあると思うんです。これを後で平田さんとディスカッションを、是非させてもらおうと思ってます。これは単に沼島で１個、ツアーをつくりましたということではありません。実際に沼島で皆さんの話を聞いた、自分でも見た、感じた。その上で沼島が抱える課題、克服する課題は、私は４つあると思いました。その４つの課題を念頭に置きながら、島の人たちの気持ちをくんだもの、何かできないかなというたたき台です。

何かキーワード、私、今回のキーワードは「ハートにドキュン、胃にドカン！」、こういう観光だと思っていて、それだけ聞くと、東京から来た課長が、なんかついに壊れちゃったなと思われるかもしれないのですけど、後で説明すれば、ああ、そうだ、これが課長の言う「ハートにドキュン、胃にドカン！」なんだなということがわかってもらえるようにと思っております。最後までおつき合いいただけたらと思います。

以上です。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

皆さん、時間認識に対して本当に感謝いたしております。といって、次の朝倉先生にプレッシャーをかけるわけではないんですけれども、引き続いて、神戸大学大学院工学研究科の教授でいらっしゃる朝倉康夫先生にお願いしたいと思います。

○　朝倉康夫委員

それでは、紹介させていただきます。

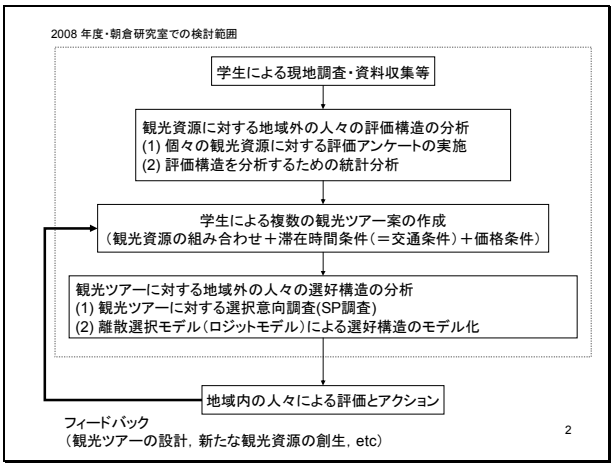
冒頭、ＤＶＤで神戸大学の学生が参加しながら、このプロジェクトにかかわっているというお話がございました。これから私がご紹介する内容は、具体的に私たちが一体どんな形でこの話にかかわっているか、具体的に何を進めているかということをご紹介したいと思います。

まだ研究というか、仕事は進行中でして、最終段階には至っていませんが、少なくとも現時点で私たちが理解したことを示し、今後、どんなツアーを考えたらいいかということの参考になれば、非常にありがたいということでお話する次第です。

このフローチャートは、前回の委員会で説明したもので、私たちはこういうところを役割としております、というのを書いたものです。

まず、沼島にはいろんな観光資源があるわけですけれども、そのうち１２個の観光資源を取り出します。その観光資源について島外の人、具体的には神戸大学の学

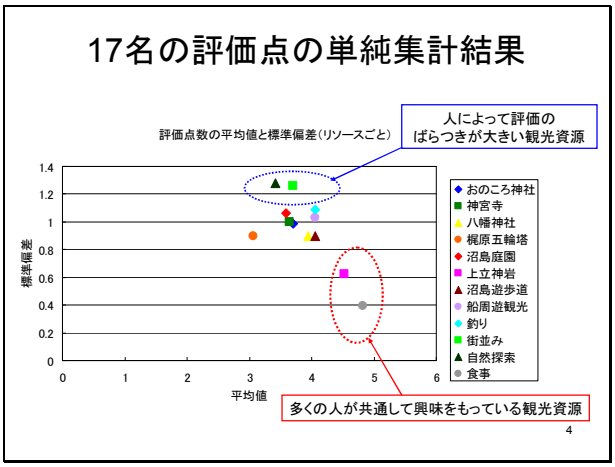
生ですが、どんなふうに１個１個の観光資源を評価しているかということのアンケートを実施して、その関係性を分析するというのが１つ目です。




次に、１２個の観光資源を組み合わせることによってツアーをたくさんつくります。そこにお金とか時間などの変数も組み入れます。そして、それぞれのツアーに学生個人が行ってみたいとか、行ってみたくないということを答えてもらいます。学生という被験者の回答をもとに、どのツアーがヒットするのか、あるいはそのツアーのどういうところが評価されているのかということを調べます。今、そういった分析をしているところです。

フローチャートで、大学でできることはここまでです。この後、地域の方、島民の方とお話することを通じて、一体どんなツアーがありえるのか、島民の方は、そのために一体何ができるのかということを一緒にお話させていただく。ということなので、ツアーそのものをつくるということが、私たちの現時点の目的ではないというふうにご理解をいただきたいと思います。

このアンケートですが、説明の部分の字が細かいので、イメージだけ説明します。左にあるように観光資源の写真、これは八幡神社の例です。その写真と、それから簡単な説明文をつけまして、おのころ神社、神宮寺、八幡神社・・・、全部で１２個の観光資源に対して被験者の評価を聞きます。「あまり興味がない」から「非常に興味がある、行ってみたい」という５段階で評価してもらいます。

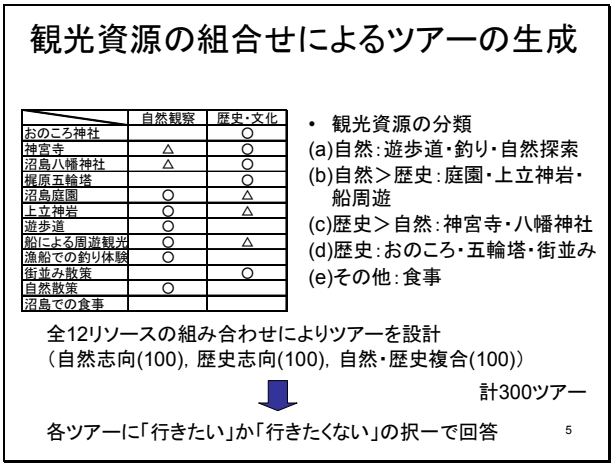



これを集計します。サンプル数１７名と少ないですが集計結果を示します。横軸が平均の点数で、縦軸が評価のばらつきを表しています。そうすると、右下のグレーの丸は食事ですが、それからピンクの四角は上立神岩、こういったものの平均点がすごく高いということがわかります。平均点が４．５というのは、９０％ぐらいの人が５点をつけているというふうにも理解できますから、大変評価が高い。

その一方で､残りの観光資源も３．５点ぐらいですから､かなり評価は高いですね。大学で授業アンケートをして、平均点が３を超えるということはないので、３．５というのは大変高いということです。また、そういった資源については、人によって評価のばらつきがあるということもわかりました。

この後、いろんな統計分析をするのですが、ちょっと省略します。このような観光資源を組み合わせることによって、いろんなツアーをつくるのですが、むやみやたらと組み合わせると、意味不明のものができます。それで、自然に関する資源なのか、それとも歴史とか文化を重視した資源なのかということによって、大きくリソースを特徴づけ、その組み合わせによってツアーをつくります。

理屈の上では２の１２乗のツアーができるわけで､４，０００ぐらいできるはずです。けれども、４，０００のツアーを評価するのは大変なので、そこから自然志向のもの、歴史志向のもの、それから自然と歴史が複合したようなもの、こういったツアーを全部で３００つくり出しました。この３００のツアーに対して行ってみたいか、行きたくないのかということを被験者に聞くわけです。




アンケートのイメージですが、例えば１番目のツアーは、八幡神社と五輪塔と街

並みを見るツアーです、２時間の滞在で、ツアー料金５，０００円です。あなた行きますかと、こう聞くわけです。被験者は「５，０００円か、ちょっとこれ行かないね」と思うと「×」というふうにつけるわけです。この「○」「×」のデータをツアーの数だけ集めます。被験者は、本当はもっと大勢の人に聞きたかったのですが、まず、できることからということで、神戸大学の学生１５名としました。１人２０問回答してもらって、３００のサンプルをつくりました。これをある分析（非集計ロジットモデルによる分析）にかけます。

## アンケート例

設問３）あなたは以下に示すツアー例に対して、行きたいと思いますか。

行きたいと思う全てのツアーの「選択結果」の欄に○をつけてください。

＊以下に示すツアーは全て、三宮出発のツアーを想定しています。

交通手段は三宮～土生はバス(約２時間)、土生～沼島は沼島汽船(約 10 分)です。

＊「ツアー内容」はツアー中に訪れる（あるいは体験する）観光資源のことを、

「滞在時間」は沼島での滞在時間のことを、「ツアー料金」は交通費・観光費用を含めた全てのツアー料金のことを表しています。

| ツアー番号 | ツアー内容 | 滞在時間（時間） | ツアー料金（円） | 選択結果 |
|---|---|---|---|---|
| 1664 | 八幡神社，五輪塔，街並み． | 2 | 5000 | |
| 2409 | 遊歩道，庭園，船周遊，神宮寺，おのころ神社，食事． | 4 | 10000 | |
| 1608 | 庭園，神宮寺，五輪塔，街並み． | 2 | 10000 | |
| 1522 | 釣り，上立神岩，船周遊，神宮寺，八幡神社，おのころ神社，街並み． | 4 | 10000 | |
| 1235 | 遊歩道，釣り，上立神岩，神宮寺，八幡神社，街並み． | 2 | 10000 | |
| 1341 | 遊歩道，自然探索，庭園，上立神岩，船周遊，おのころ神社，街並み． | 4 | 2000 | |
| 1873 | 遊歩道，上立神岩，神宮寺，おのころ神社，五輪塔，街並み． | 6 | 2000 | |
| 424 | 庭園，船周遊，八幡神社，おのころ神社． | 4 | 2000 | |
| 1888 | 船周遊，神宮寺，おのころ神社，五輪塔，街並み． | 4 | 2000 | |
| 1858 | 釣り，神宮寺，おのころ神社，五輪塔，街並み． | 6 | 10000 | |

神戸大学学生15名がひとり20問回答 → 300サンプル

6

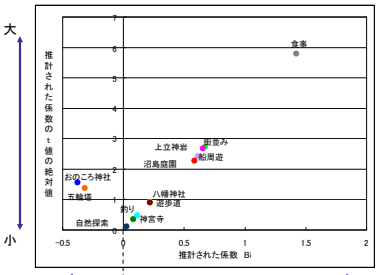
分析の前に、行ってみたいというふうに答えた人が、どれぐらいいたかというのは、下の表を見てください。自然、歴史、複合それぞれ１００ツアーに対して、自然ツアーについては行ってみたいと思った人が３割ぐらい、歴史ツアーだと２割ちょっと、複合だと４割ぐらいの人が行ってみたいと答えたということです。本当はもっときちっと分析しないといけないのですが、大雑把に言うとこんな感じになります。

## ツアー選好モデルの推定結果（選択数とリソースの影響度）

| $X_i$ | t値 | b値 |
|---|---|---|
| ツアー料金 | −13.304 | −0.000441 |
| 滞在時間 | 5.825 | 0.478 |
| 食事 | 5.797 | 1.421 |
| 街並み | 2.732 | 0.671 |
| 上立神岩 | 2.668 | 0.654 |
| 船周遊 | 2.426 | 0.612 |
| 庭園 | 2.277 | 0.585 |
| おのころ | −1.558 | −0.378 |
| 五輪塔 | −1.366 | −0.318 |
| 八幡神社 | 0.924 | 0.22 |
| 遊歩道 | 0.89 | 0.219 |
| 釣り | 0.468 | 0.112 |
| 神宮寺 | 0.352 | 0.083 |
| 自然探索 | 0.115 | 0.028 |
| 定数項 | −2.145 | −1.227 |

$\rho^2$=0.674

尤度比：モデルの当てはまりの指標
(0< $\rho^2$<1で1に近いほど良い)




| | 選択されたツアー数 | ツアー数 |
|---|---|---|
| 自然ツアー | 34 | 100 |
| 歴史ツアー | 23 | 100 |
| 複合ツアー | 43 | 100 |
| 全ツアー | 100 | 300 |

ツアーの効用への影響

効用を下げる　　効用を高める

7

それでは、どういった要因がこのツアーの選択に効いているのかと言うと、より効いている順に上から並べたのが上の表です。一番効いているのはツアーの料金、高いのは全然だめということです。それから滞在時間、滞在時間が短いのもだめということになります。それから次に効いているファクターは食事、それからさっき平田さんは、街並みはいいよねと言っていましたが、学生も街並みには反応しているわけです。それから上立神岩、あるいは船周遊とか、こういったものの評価が高いということになっています。もちろん、これは下の方にあるのがだめということ

を言っているわけでは全くなくて、平均的に見るとこのような形で要素が効いているということになるわけです。

ただ、被験者を幾つかのグループに分けて分析しますと、この順番が入れ替わるわけです。例えば行ったことがある人、ない人、それからどんなことに関心を持っているかということとか、グループごとに要因（重視される資源）の順番が入れ替わります。つまり、グループをうまくセグメンテーション（グループ分け）して、各グループに受け入れられるツアーをつくるということがすごく大事ということです。

私どもがこれまでに理解したことですが、まず我々がつくっているモデルの統計的な当てはまりは悪くないようです。

つぎに、ツアーの評価にプラスに効いている要因は、今回のサンプルに関する限り食事とか、街並みとか、上立神岩とか、船周遊とか、こういったものの評価が高いということがわかりました。当然、料金とか滞在時間というのも大きいです。ただ、今回のサンプルに関する限りなので、必ずしも一般的にいえるとは思わないでください。

また、どういうツアーが選択されやすいかというと、複合ツアー、それから自然の順です。これは被験者が学生ですので、そういったところに点数が高いのは当然でしょう。

ここからは、スライドでお示ししてない分析の結果を受けていますので、ちょっと論理が飛躍していますが、複合ツアー、自然ツアー、歴史ツアーごとに先の分析をしてみました。その結果、自然と歴史の両方の要素を持つ資源、例えば沼島庭園とか、神宮寺とか、上立神岩とか、こういったものがうまくいろんな資源の間をつないで、ツアーの魅力を高めているということがわかりました。こういう資源を上手に混ぜるということが、ツアーを作る上で大事ということかと思います。

**選好構造の特徴と，ツアー設計に向けて**

- モデル全体の統計的な「当てはまり」は良好
- ツアー評価へのプラスの影響度(t値が正で絶対値が大)の大きなリソースは，食事＞街並み＞上立神岩＞船周遊
- ツアー料金，滞在時間の影響大
- 選択されやすいツアーは，複合＞自然＞歴史の順
- 複合，自然，歴史の各ツアーごとの分析→　自然と歴史の両方の要素を持つリソース（沼島庭園，神宮寺，上立神岩）が「つなぎ役」を果たす
- 沼島に行った経験の有無による違いを分析→　リソースの影響度に違い→　初めて訪れるヒト向けの「基本ツアー」と，リピーター向けの「リソース絞り込みツアー」を考えるべきか．
- たとえば，基本ツアー（ツアー選択にプラスの影響を持つリソースから構成）＋オプション（ツーリストの嗜好に合わせたリソース）

8

沼島に行ったことがあるか、ないかということで分析しますと、効いてくるリソースに違いがあります。初めて訪れる、行ったことがない人に向けて、こんなツアーがいいですよと言ってオファーする場合と、リピーター、行ったことがある人に、ツアーを売り込むのとは全然違う。これは自明なのですけれども、そのことが分析の結果からわかったわけです。

例えば、はじめての方に向けての基本ツアーは、どっちかというと事前のパンフレットなどを見て魅力を感じる資源からツアーを作る。それでまず魅力を作り、それにプラス、オプショナルな、その場所に行ってみないとわからないというのがつ

いてくるようなツアーを考えると、非常に有効なのではないかと考えられるわけです。

私も実は沼島に、前々回の委員会のときに初めて訪れまして、そのときに神宮寺の石庭なんかも見せていただき大変感動しました。今日つくってもらったパンフレットの裏面に、神宮寺さんの石庭にある司馬遼太郎の言葉というのがあります。その最後の２行で、沼島は小さい島だけど、そこの島に住んでいる人は「気概と能力」、これにたけている、非常にそれがすぐれているということを言っています。すごくいい言葉なので、こういった言葉を大事にして、いろんなことを考えていくといいのではないかと思います。

ありがとうございました。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

それでは、続きまして再び平田進也さんに少しお話いただくんですけれども、具体的なツアープラン、これはどうだという話になりますと、これはもう次のディスカッションにちょっと取っておきたいので、それ以外のことで今お三人にお話いただいたことも受けまして、また、先ほどのお話のときにちょっと触れられなかったというようなことを、補足的にお話いただけますでしょうか。えらい注文が多い客で申しわけないんですけども、お客さんの声を聞いていただいて、お話いただきますように、よろしくお願いいたします。

○　平田進也氏

本当にありがとうございます。

またまた登場させていただいたんですが、本当に今先生の方の発表を聞いてたら学生さんのモニターをやって、何人の子にアンケートをとって、これをグラフに表した。興味深いですね。我々も、本当にお客さんの声というのが一番大事ですから。でも、こちらで我々が思うのは、総体的にいろんなパターンのお客さんをご案内しておりますので、学生さんだけやなく若い方も、もっと若い方で小学生から８０歳、９０歳のお客さんまでご案内してますから、いろんな声があるわけです。

あのグラフでは、釣りにあんまり興味がないみたいな感じでしたけども、釣りが好きな人やったらもうたまらんわけですね。あれがトップに出るわけですね。釣りのメッカみたいな感じで、本当にすばらしいというような評価もやっぱりあるでしょうし、その出し方もいろいろあると思うんで、分析の仕方が学生さんの中ではこういうような感じやったということで、本当に的はつけてると思います。

お客さんの底辺が一番広いのは食事です、食事。食事がどうかということは、もう大きな観光の要素になりますし、素材がいいのがあるかどうかいうのも１つになると思います。それは沼島はもう言ったとおり、見たとおり、沼島のハモとあのアジ、これがあったら本当にほかの魚も全部ついてくるわけですから、全然もう問題はないと思うんです。

ほかにも観光地はいっぱいあって、歩いてみないとあのよさはわかりません。で

すから、ここで一つ思うのは、沼島のガイドブックというのを、本当に僕はあんまり見たことないなと思うんですけど、あるんでしょうか。沼島のガイドブックというのはあるんでしょうか、この沼島だけのガイドブックというのは。沼島のガイドブック、本当にいいのあるんですか。僕は本当に申しわけないです、見たことないです。

だからそのガイドブックも、今ＪＴＢがやってる「るるぶ」とか、いろんなやつのあんな本がありますので、あんなとこでも取り上げてもろて、こんな素材があるんですよというのを、もうちょっとやっぱり地元の知ってる人で、裏の裏まで沼島をご紹介するようなとこがあっても、ええん違うかなと思いますわ。それを知ったらお客さんはこの島には、こんな近くにあるんやから来ると思います、やっぱりね。

近くで海外旅行という感じで、二度の海外旅行ですからね、我々は明石大橋を通って。僕は思うんですけど明石大橋のあの橋ね、あれ無料にしたらどないでしょうかね。無料にしてもろて来やすいようにしたら、もっと沼島に来ると思うんですよ。今、たこフェリーも行ってますけども、あの橋を沼島に来る人はちょっと安うしてもらうとか、沼島に行くということやったら、あのフェリーに乗る券を持ってたら割引になるとか、そうしてもらわんとあの橋は高いですわ。駐車場は５００円ですけど、あれは安いですけど、もう橋が高いから全体にやっぱり高うつくわけですね。あれを沼島のことやったら、ちょっと割引にしてもらうとかいうような施策を、国の方でできひんもんやろうかと思うたりするんです。あれが動脈です。それを洲本から、神戸からは船はないんでしょう、ありませんね。神戸の人やったら、やっぱりあの橋を渡らんなあかんですわね。たこフェリーで行って、渡ったとこからでも１時間かかるわけですから、その辺の黒岩の水仙峡まではみんな、僕らよう行くんですよ。そこからは行かないです。今行かしてもらって、本当によかったなと思いますので、ぜひお客さんに勧めたいと思うんで。

後ほどまた先生から、グルメの話とかいろいろ出るような予感がいたします。グルメの話とか、いろいろ先生は考えておられるような感じですから、それでまた意見を戦わせたいと思いますので、僕はもうこの辺にさしていただきます。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございます。

それでは、パネリストの発言としては最後になりますけれども、正司健一委員長からお願いいたします。

○　正司健一委員長

いろいろ興味深い発言の後を受けて、調査委員会の委員長として発言するのは正直しんどいところですが。先日、とある大学の先生と、地域づくりについて少し議論する機会がありました。そこで話題になったのが、地域づくりに熱心な地域の一つについて、考えてみれば２０年前、変なおっちゃんとみんなが指さしてた２人の方が、ちょっと表現は悪いですが、もう勝手なことをいろいろやってただけなんやけど、それがいつの間にか輪が広がって、現在の元気さになってるんやと。沼島もそういえば見ようによったら「ぬぼこの会」さ

んの活動って変な活動なんですよね。ただ、そのとあるところとは違って、これは中川さんの人格というかキャリアのおかげで、中川さんがされているということで、何か島の方々から一定の信頼感を得てるような気がするんですね。これは財産だと思います。そこに甘えてしまってはダメですけど。

実際、この調査委員会を始めたとき中川さんに初めてお会いして、すっと何の違和感もなく、中川さんたちの努力をてこにして議論を広げていけばいいなと気が付きました。伊藤さんがおっしゃっておられた調査設計にかかわる話になって、ああ、それでいいなと思ったんです。多くの場合、実はそこのとこが難しいんですね。その点では沼島というのは、いいスタート台から動き始める環境にあると思います。

でも、その活動が先ほど人数の話が出てましたとおり、まだ広がってるわけでは決してない。それでもやっぱりこの輪を広げるための議論で、沼島の現状をみんなが本当に前向きな議論として、できるような輪を広げるようなことにはどうしたらいいのかということが大きな課題かもしれません。このことが大切だなとわかってきた委員会だったというのが、実は正直な、ちょっと感想めいたことですが思っています。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

皆さんは大体予定どおりの時間、正司委員長にいたっては、後にちゃんと時間を取っていただいたんで、これからそれでは最初のご報告でございますとか、あるいは今のご発言を受けてディスカッションに移ってまいりたいと思うんですけれども、最初にご紹介いたしましたように、こういった動きが定着していくということが非常に大事だと、もうここがポイントだと思うんですけれども、まず、昨年の９月から、こういう沼島モデル策定についてのいろんな動きがございましたけれども、それ以降の沼島における変化といいますか、地元での感覚としていかがなものか。この辺について中川さん、ちょっとお話をご紹介いただければありがたいんですが。

○　中川宜昭委員

先ほどちょっとバタバタした中で話しましたんです。ちょっと最初に、いろいろ国土交通省の運輸監理部の方々ですね、それから神戸大学の先生方、いろいろとご支援いただいてありがとうございました。

おかげできょうも何人でしたかね、２０名ほど来てるんですが、これは「ぬぼこの会」だけじゃなくて地域のリーダーになる人たち、若い人たちも入っておるわけですが、何かやらないと、アクションを起こさないといかんなという、そういう思いを持ってくれたということですね。

私たちも決して「ぬぼこの会」、先ほど５名と言いましたが、実質２０名ほどのメンバーがおるわけなんですが、高齢者もおりまして、フルに活動というのはなかなかいきにくいんですが、今、私たちが持ってるそういう思いのようなものを地域にどう広げていくか。この島の地域、埋没しそうなこの沼島の地域を、あと何年かたつと６００名からもうはるかに減っていくわけですね。そこに少し平田さんの言う光もあるし、やっぱりそこに住む者たちが輝いていくような観光開発になっていかないかんと。そのためにはやっぱり若い人たちの力が要るし、自分たちがこの地域をどうやってやるんかという。実はだれかにしてくれということやなしに、自分たちに何ができるのかという、こういう提案をこれからの若い人たちと一緒にやって

いくというか。我々の持ってる「ぬぼこの会」の思いというようなものをどう共有して、みんなと一緒に地域に光が当たってくるかという思いで今おるわけですね。少し精神的な変化が出てきてると思います。

もうこんなところは仕方がないんやと思うとったんが、沼島というところはやっぱり魅力のあるとこなんやなという思いが地域の者に持てた。少し持っていく非常にエネルギーになってきてるんやないかなと、そういう思いであります。楽観はしてませんけども、そういうことです。ありがとうございました。

**〇コーディネーター（富田昌宏）**

沼島には小学校と中学校で、高校になったら皆さんは本島の方に行かれるといいますか、淡路島の方に出られるというふうに聞いておりますけども、地元にいらっしゃる小学生、中学生というような小さいお子さんたちに、こういう動きというのはどのような影響を与えている。まだそこまでいってないということなのかもしれませんけど、その辺についてちょっとお聞かせください。

**○　中川宜昭委員**

子供たちはまだ我々の活動について、そんなに意識的には見てないと思うんですね。ただ、人に出会う中で啓発される部分がありますから、子供たちも何かこのごろよその人たちがようけやって来とるのな、何しに来てるのかな、ここには魅力があるものがあるんかなと、そういうようなものは持ってくれとると思いますね。

しかし、要はやっぱりこの島に住んで、魅力があって経済活動ができるという展望がないと、子供たちもやっぱり島を離れるしかないわけですね。だからこの島に残るエネルギーをどうやってつくっていくか。これはこれから島民と一緒に考えていかないかん問題やと思ってます。

**○　コーディネーター（富田昌宏）**

ありがとうございます。

そうしますと、こういうような動きが定着して、そういうようなことが、ひいては航路というようなものを利用する人びともふえていくというようなことになろうかと思うんですけれども、そういうような交通の面から今後の活性化というようなことについて、いろいろご経験のある正司先生、こういったものを定着させるというのをもう少し幅広い、交通ということが主たるフィールドだとは思いますけれども、もう少し広い視点から何か、こんな点に気をつけてやっていけばうまくいくというような、そういうのはいかがでしょうか。

**○　正司健一委員長**

特効薬があれば、こんな委員会をしなくてもよかったんですけれども（笑）。そんな特効薬は残念ながらないんですよね。今、中川さんがおっしゃられたように、島に残ることにエネルギーが要るのは間違いないことかもしれないけれど、だれも残りたくないと思うような島には、だれも観光には行きたくない。決してそんな島ではないはずなんですね。

だから、例えば平日はもっと経済活動の活発なとこへ行くけど、やっぱり週末は沼島に帰ってのんびりしたいという、そのレベルでもいいので、そういう形で島民の方々が、やっぱり島へ帰った方が楽やな、のんびりできるわと思われてると。少

なくとも我々ここら辺の人間は、沼島に行った経験が少ない人間ばっかりが今回行ったときに、異口同音にえーとこやなという話をしてました。そして、この雰囲気が観光地としての魅力になるわけですから。さらに、同じような生活をしたいと考えている人が島の外にもいるかもわからない。それだけに、皆さんは自分たちがここでのんびりすると感じているんやったら、同じようにのんびりしてみませんかとどんどん呼びかけてみて、声を出して何ぼかなと思うんですね。

こんなことやってうまくいくかなと思い始めると、失敗する理由ばっかり目につき始めるので、それを探し始めるより動いた方が勝ちかなと。先に動いた方が勝ちだろうと、平田さんもおっしゃっておられました。そういう気は強く持ってます。

○ コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

えらい急にちょっと難しい質問を当ててしまいまして、申しわけありませんでした。

それでは少し具体的なツアープランといいますか、そういうようなことに話を進めてまいりたいと思うんですけれども、まず最初に伊藤課長の方から、例えばこういうような案がというような、先ほども少しお話が出ましたけれども、その点を具体的にちょっとお話いただこうかと思います。よろしくお願いいたします。

○ 伊藤政美委員

パネルディスカッション資料２という資料を見てください。なんかちょっと見づらいような印刷ではあるんですけれど、ご容赦ください。

たたき台です。さっき平田さんから先生、先生と言われて、自分のことだと思ってなくて、富田先生はグルメなんだと思って、聞きましたら私のことだったということで済みません。

たたき台ということで広域観光圏、つまり淡路島全体で国の観光圏というものに認定されて、淡路島全体で盛り立てようしている動きがあります。それにうまく乗れば沼島だけでみんなで頑張るだけじゃなくて、うまくホテルであるとか、ほかの事業者を巻き込んで、負担を持ってもらえて沼島も潤ってくる、そういうものを考えてみました。これから観光圏の事業はいろいろ進んできます。きょう南あわじ市からも水田次長にも参加いただいています。本当に官民あげて取り組んでいけば実現できるのではないか。これを考えるときに、いろいろ漁業との連携ということで中元さんの顔が浮かんだり、ああ、島津さんに船乗せてもらったなとか、そういうのを思い浮かべながら私なりに考えてみました。

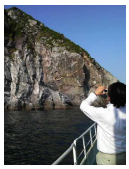
２ページをごらんください。今、沼島の観光って何だというと、恐らく今「ぬぼこの会」が頑張っている島めぐりのガイド、そして沼島といえばハモ、そして島の周遊だと思うのです。今の現状はこれ、そしてこれはうまく生かしつつ、さらに一歩進めることができないか、新しいことができないか。

現在の沼島観光

○沼島の自然・歴史巡り（ぬぼこの会）
○ハモを食べに来る
○島の周遊観光

島巡りツアー

はも料理（木村屋ＨＰ）


周遊

2

きょうゲストでお越しいただいている、私、テレビで何回かやっぱり見たことがある、本当に初めてじゃなくて何回かお会いしたような気がしてしまうのですが、平田さんから貴重なお話をいただいた中で、いわゆる「ぬぼこの会」だけが頑張るのではだめですよという話。自然を生かしたウオーキングやトレッキングみたいものを、うまく生かすことができるのではないか。ターゲットは熟年、団塊の世代、そういう人はどうだろうか。また、主婦の口コミ効果、東京でもそうですけど若い女性の口コミ、また主婦の口コミ、これは非常に大きくて、インターネットなんか、そういう評価がついているようなものの評価を見て選んでいくなんていうのもありますから、この口コミはあなどれない。

そして少しでも沼島にお金が落ちるシステムというものも必要だという話、そして淡路島との連携を考えたらどうだという・・・話、ああ、それなりにうまくおさまっているなと思って安心したところではありますが。

３ページをごらんください。先ほど私、沼島には、これから観光を考える上で４つの課題があると話をさせてもらいました。１個は、やはり「ぬぼこの会」の負担を減らしてあげたいということなんです。でも、ガイドの仲間をふやすといっても、多分地元で「ぬぼこの会」が頑張っているのを見ている人たちは忙しそうだな、家事があるしな、土日は家族と出かけたいしな、歴史を覚えるのはもうしんどいという気持ちってやっぱりあるんじゃないかな。じゃあ、それを乗り越えるのはどうすればいいのか。じゃあ毎日じゃなくてもいいですよ、歴史に詳しくなくてもいいですよというガイドができれば良いのではないか、これ課題の１。

【課題１】沼島の自然・歴史巡り（ぬぼこの会）

○　ぬぼこの会の負担軽減
（現在）ぬぼこの会の中心メンバー
（５名ほど）がフル回転している。

⇩

ガイドの仲間を増やせないか？
・忙しそう、家事もある、土日は家族と出かけたい・・
・歴史を覚えるのはしんどい・・

⇩

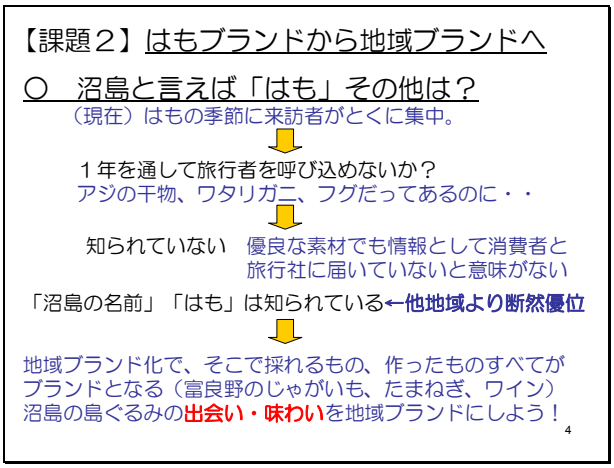
・毎日でなくとも良い
・歴史に詳しくなくても良い

⇩

現在の島巡りツアーに一工夫！

3

次、課題の２です。沼島といえばハモ、でも、これは１個のものが有名になり過ぎると、ほかのものが霞んでしまう。だから沼島にはせっかくワタリガニもある、フグもある、おいしい。だけどハモがあまりにも目立ち過ぎているから気づいてもらえない。でも、ほかの観光地の例でいくと、大抵はどこにも知られてないのを何かバーベキューイベントでもして、旅行社の人を呼んできて知ってもらおう。でも大抵来るのは、本当に商品企画しているような人たちじゃないのが来てしまって、結局ごちそうさまでしたで終わってしまうとか、あと自治体が助成をして、観光ツアーをつくるなんていうのもあるのですが、これは悲しいかな金の切れ目が縁の切れ目で、助成が終わったら、はい、さようなら。




なぜなら旅行業はボランティアではないのです。いわゆる鉄板で確実に儲かるもので確実に儲けると。旅行業も今、人を削っています。のんびりと出かけて行って、何か探してきますなんていう余裕はありません。そういう中で、沼島というのは名前は知られている、そしてハモという有力なコンテンツがあると。じゃあこれは他地域より断然優位に立っていると、その優位は活かしましょう。そこであげるのが、地域ブランドなんです。

私、生まれは北海道の富良野です。富良野で採れたものって、ただのイモなんですよ、ただのタマネギですよ。そこでとれるワインなんかもありますけど、富良野って名前がつくだけで、なぜか肥沃な大地で栄養いっぱいで、何か気持ちよく健康になりそうな感じがしてくる。ただのイモなんですよ。

沼島も、こういう沼島で島ぐるみで取り組んでいる頑張っている。そういう沼島でとれるハモなんですよ、アジなんですよ、海草なんですよということで、地域ブランドにしよう。これからの流れというのは、単品の作物をブランドにすることではなくて、地域全体をブランド化することによって、そこでとれるものすべてがブランドになる。そういうものをぜひ目指したらどうでしょうかというのが、課題の２です。

課題の３、アクセスという話がありました。こういう地域で取り組みをしようとすると、いや、道路が不便だから観光客が来ない。テレビで道路の既成会が「エイ、エイ、オー」と道路が欲しいとアピールしている映像が流れていることがあります。でも、空港できたけど人来ないとか、道路できたけど人来ないっていう先進事例は少なからずあります。結局アクセスというのは、必ず皆どこかに行くためのアクセス、目的地の魅力がないと道路をつくってもダメなのです。また、どんなに不便であっても、目的地に魅力があればどこでも行くんです。

【課題３】アクセス

○　沼島への行きやすさ

⇩

距離の負担を感じさせない一工夫

Key
淡路島の
広域観光圏

【課題４】沼島の経済的潤い

○　ごみだけ落ちる観光は持続しない。

⇩

旅行者は「理由をつけて」財布のひもを緩めたいのだ

⇩

旅行者が財布を開く理由（地域の資源を商品へ）
をつくろう！

5

東京からわざわざ富良野へ来るんです。住んでいた私にしてみれば、何でこんなとこにわざわざ東京から来るのだと。さらに知床なんて行くと、行ったことあります、よくまあこんなとこに東京から来るものだと。でも、行く価値があれば不便というのはむしろ、恋愛もそうです、ハードルが高いと、何かそこで頑張らなきゃという気持ちになるのと同じです。なので不便である現状は現状として受け入れて、まず魅力を高めようと。そうすれば沼島に行くツアーができれば、貸切バスで行くとか公共交通が不便だというところを、乗り越えるきっかけができるかもしれない、これが課題の３。

そして課題の４です。経済的な潤いというと、旅に行く人はお金を使う理由が欲しいのです。お金を使う理由があれば、財布は開いてくれるもの。北海道なんかでもそうなんです。イクラ丼とかウニ丼とかに３，０００円とか皆平気で払うのです。地元の人にしてみると、何でここの寿司屋で３，０００円も払ってしまうのだろう。だけど沼島でもお財布を開いてもらえる理由を作り、そして満足して帰ってもらえるものがあれば、決してお金をもらうことは悪いことではないと。だって喜びと思い出を持って帰ってもらえるのですから、みんな幸せになれる。そういうことで、これが課題の４。

そこで、じゃあ具体的にどんなことができるんだろうというところで、淡路島観光圏を活用しましょうというところで、６ページです。

「淡路島観光圏」を活用する

【観光圏】２泊３日以上の滞在型観光を促進する
ための広域観光施策
→平成２０年１０月　淡路島を認定

【支援メニュー】旅行業法の特例
ホテル・旅館が観光圏内の地域密着型ツアーを販売できる

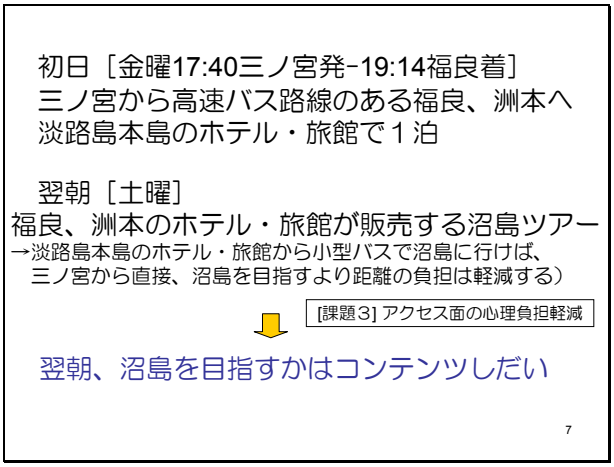
⇩

沼島を淡路島２泊３日コースの目玉観光
スポットにしよう！

6

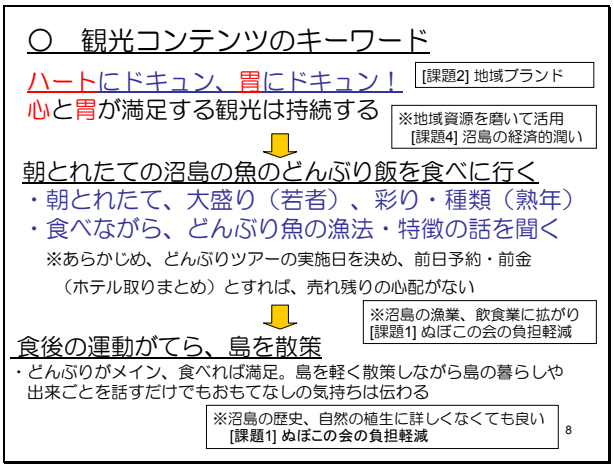
ここに淡路島の観光圏は何だろうというところで、観光圏というのは広域で観光

を考えて、その圏域全体で２泊３日以上滞在してもらおう。淡路島で言うなら、淡路島のエリアで２泊３日以上楽しんでもらおうという考え方です。ここで観光圏に認定されたことによって、地元のホテルや旅館が、地域密着型のツアーを販売することができます。旅行業法の特例です。これをうまく使ったらどうだろうかと考えました。




７ページをご覧下さい。例えば公共交通で来ますと、三宮から高速バスに乗って福良に来るだけで片道２，２００円かかります。沼島汽船は往復で８８０円なんです。なので２，０００円や３，０００円で沼島に来て、食べて、楽しんで帰られるツアーなんてあり得ないのです。その基本を押さえた上で、じゃあどういうことができるのかという設計をしないと、絵に描いたもちで自由研究でしかないと。

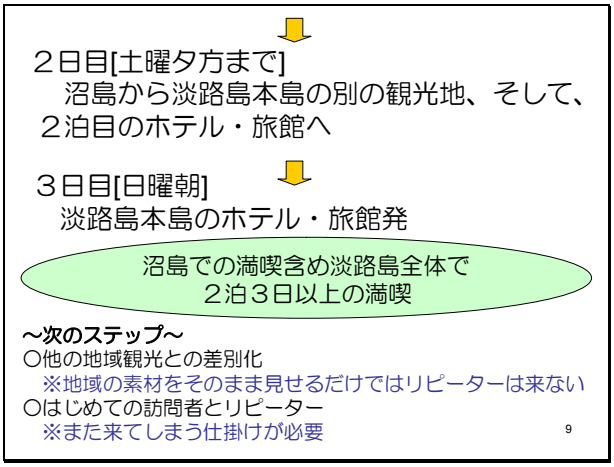
そうすると例えば金曜の夕方、ちょっと仕事を早目に終わらせて、沼島に行く前に最初に淡路島本島のホテルに泊まります。そして翌朝、朝早くでもちょっと遅目でもいい。沼島に行こうと思うプランをつくることができれば、直行で沼島に来ることから考えれば疲れは少ない、かつ淡路島全体も潤うのではないか。




じゃあどういうコンテンツ。沼島に来るか、来ないかはコンテンツ次第というところで、先ほどのキーワード「ハートにドキュン・胃にドカン！」なんです。何を課長言ってはるのですかと思われるかもしれないですが、心と胃を満足させる観光は成功する、持続すると私は思っています。

そこで考えました。中元さんの顔なんかを浮かべながら、朝とれたての沼島の魚のどんぶり飯を食べに行くツアーなんてどうでしょうか。朝とれたて、かつ大盛り

じゃなきゃだめです、ケチっちゃいけない。もう食べ残しするぐらいの量でどか盛り、そして食べるなら漁師の方に今日釣れた魚はこういう魚だよ、そしてこういうふうにとるんだ、そしてこれはこういう季節だけ採れる魚だよなんて話を聞くだけで、ああ、そうなんだ、勉強になると。あらかじめホテルに前日予約でツアー申し込みをして、そして来る。前金制という形にしておけば、売れ残っちゃった、用意したのに客が来ないということを避けることもできます。そしてそれが終わったら、もう皆さんはお腹は満足してますから、決して自然や歴史に詳しくなくても、ちょっとしたまちめぐりでも島の生活が伝わる、気持ちが伝わるものであれば十分喜んでもらえる。平田さんから話がありました、心が通い合えるということが大切と考えれば、「ぬぼこの会」以外の方ももっと気軽に関わっていけるのではないかと思ったところです。




そして、こういうものをやっていく上で次のステップとしては、最初はちょっとした８０メートル道路でも喜ぶかもしれないけども、リピーターは来てくれません。リピーターを考えることも必要、これが提案です。

以上です。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

今の話を聞かれて平田さん、どうですか。日本旅行の方で営業マンとして、課長をスカウトしていただいたらというような名案・・・だと思うんですけど、評価をぜひよろしくお願いいたします。

○　平田進也氏

きょうから部長で来てほしい、一緒に働きたいなと思います。本当にありがとうございます。ソフトな口調で、僕もずっともう心と胃にドキュンです。びっくりいたしました。本当になかなかすばらしいなと思いました。

言うていただいたことは本当にもうもっともで、地域のブランドをつくる。これはもう関アジ、関サバとかもうブランドになるように、五島の魚、氷見の寒ブリ、こういうのはもう全部僕らはブランドで売りますから、それを沼島のというたらハモとアジということなんですけど、ハモなんかいうたら季節的には夏ですわね。冬にはないわけです。ハモなんか出しても、これちょっともうハモはあかんいうことです、とれても。結局、冬においしい魚はあるわけですわね。この間１月２１日に

行って、それもびっくりしました。そういうような部分もあるのに、それをブランドというか名前がついてないだけで、言われたワタリガニ、これなんかすばらしいいうて、そこの女将さんからも聞きました。木村屋さんで、そういうのを食べに来る人は毎年おるいうて。でも、知らんもんやから今ガラガラなわけで、それをブランドにしたらどうでしょうということで、やっぱりそれはいいんやということを、どんどんやっぱり言うていかなあかんと思いますよ。

認定、もう勝手に認定でもいいですやん、沼島認定でもいいですわ。もう認定して、これはうまいんやということで、お客さんに食べに来てくれということで、ほかの県の方を大阪からどんどん呼んでやるというのは、やっぱりいいと思います。

先生が先ほど言われた朝のどんぶりですか、とれたてどんぶり、これはいいですね、これはいいです。「うまい」というのが、もう明らかにやっぱり僕らにイメージできます。やっぱり人はちょっと違うもんを食べたいんです。私だけのを食べたいんですよ。こだわったものを食べたいんです。平田さん、口に入れてということです。量はほんまに先生が言わはったけど、量はなみなみですよ、大盛りですよと言うたけどね、大盛りは要らんのですよ。熟年の方というのは、もう量は要りませんね、皆さん。おいしいもの、ほんまにうまいもんを口に入れてくれたなと。おいしいものを数多く入れたいですね。１つだけで、オムライスだけでお腹いっぱいになるのは嫌ですね。そういうものを、おいしい魚をちょこちょこと、シュッと詰め合わせてギュッと入れてもらうと、ほんものを兄ちゃんは食べさせてくれたなということになります。

そういうのを、やっぱり狙ってはるわけで、このどんぶりが例えば４，０００円でも５，０００円でもいいと思います。値段が高ければ高いほど、お客さんはワクワク感、ドキドキ感を持てるんですよ。礼文・利尻のウニ丼とかイクラ丼、ウニとイクラの二食丼とかいうて僕ら売ります。何ぼ高かっても高いところは売れるんですよ、これ。もうそのイメージを焼きつけて、こんなんやでいうて、聞いただけでよだれが出るような、これをやっぱり演出していかんとあかんと思います。その素材は沼島に僕はある言うねん、もう絶対あるんです。それを朝とれたての漁師さんから説明聞いたら、おいしい素材だけを皆さんに並べて送る。日本一のどんぶりやということです。

これは何でこんなことを言うかというたら、高千穂に日本一の朝食というのがありますねん。これ行かれた方もいらっしゃると思いますが、「四季見」やったかな、そのホテルで日本一の朝食いうて売ってますねん。それは大きなざるのとこにいっぱい産みたての卵と、海苔ももう最高の海苔と、いろいろ焼き魚とか最高のやつを入れて、その大きなざるのところにもう盛り合わせてあるんです。そのざるも２つほどあって、お米も最高のお米を炊いて、そこで産みたての卵に最高の醤油をかけてつるつるっと食べるんです。日本一の朝食て言うてますねん。

何が日本一かわからないんです。でもお客さんが見たら、もうメニュー表にも書いてあるし、ああ、日本一やなあと思うんですよ。この旅館へ来てよかった思うて、日本一や日本一やいうて、何をするかいうたら写真を撮りよるんです。写真を撮って何しますの言うたら、日本一を見せるねんて、みんなに。そういうようなことで、こだわったやつで認定したやつは、みんなそういうブランドが欲しいんですよ。だからエルメスやヴィトンや何とかいうて、ソウルの免税店でばかほど売れるんですよ。認定されてるし、ええもんやから。

ええもんの素材があるのは、もうわかってるんですわ。それを認定することだけ

です。淡路島とか兵庫県で認定されたということにしといて、王冠なんかをつけて、このどんぶりを皆さん食べに来ませんかと。そのかわり限定５０名なんですと。５０名ですと言うたらフェリーは５０名しか乗れませんねん、その便で。それで行って向こうで食べるいうのは、僕はこれは嘘ではないと思いますよ。

そんなんしてね、皆さんのワクワク感、ドキドキ感をずっとやっぱり増幅さしていくというか、楽しましていく。行く前のドキドキ感も旅行の代金のうちやと言うんです、僕は。旅行へ行く前に何を着て行こうかとか、何を履いて行こうかいうてみんなドキドキしますやん。カレンダーに「○」を打ちます。どんどん高揚していくんですよ、気持ちが。ツアーに行ったらファッションショーのステージですわ、ええの着てるから、みんなに負けたらあかん。そんな感じのとこのワクワク感、そのときの沼島ですよ。これ非日常なんです。日常食べてるスーパーでの魚やないんです。沼島のとりたての魚、これを食べるのが非日常、盆と正月が一緒に来たようなもん。これをやっぱり演出したのが、ここにステージがあると思うんです。

僕が１つやっぱり思うのは、ここの沼島でもっとやっぱり人を定着ささなあきませんわ。どんどん減っていくとか言うけどね、減っていったら船も要らんようになるわけですわ。もう５０人ぐらいとか６０人ぐらいやったら船は要らん、泳いで来いというようなもんです。そんなわけにいけへんけど、便を減らしてもええやろういうようなもんですよ。そんなわけにいきません、沼島の人も生活するし、救急車で運ばれる場合もあるやろうし、病院も行かなあかんし、そんなんやっぱり生活路線として要ります。そのためには、沼島の人口は守らなあきません。

守るよりも、ふやすような努力をしていかなあかんということになると、先ほど言うたもうリタイアメントハウスとかいうて。永住せえとは言いませんよ、そっちの家を売って、こっちへ来てくれとは言いませんねん。さっき言うた週末だけこっちへ来てくれとかいうことで、季節のええときだけ来てくれいうのを言うて、今、もう廃屋になったような家を、古民家を、そこをちょっと国に言うてリニューアルしてもろて、出してもろて、そこへ住んでもろて、近所のボランティアの方がちょっとお世話しに行く。とれた魚やから、これ食べてくださいとか言いに行く。それで心通わせて、祭りやから参加しませんかいうたら、ああ、ここはええなあということになって住むかもわかりませんやん。

よそ者が来てもろたら、なかなか困るいうとこあると思うんですけども、それをちょっと心を広うしてもろて、ちょっとよそ者を入れてもろて、僕らももうリタイアしたら住みたいなと思ってます。住民票を、よかったら入れさせてもらいますから、仲間に入れてもらえますか。よろしくお願いします。そんなことで。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。

そういうようなことで、もしと言うよりも、こうなってもらわないと困るんですけれども、沼島にたくさんの方がお越しになる。例えば、１年間に仮に１万人ふえるとしましても、ピークシーズンだったら１日に２００～３００人来られるかもしれない。そうしますと、当然、観光客と地域住民の生活というのがうまくマッチングしませんと、地域の方にとっては、観光でたくさん来られるけれども、これはもうたまらんもんじゃないと、こういうことになりますので、何かその辺、工夫を。ちょっと先走りかもしれませんけれども、何かいい知恵がないもんかというようなことも少し考えておく必要があると思うんですけれども。朝倉先生、こういうふう

な点について、何かいい知恵というものはないもんでございますか。

**○朝倉康夫委員**

非常に難しいトピックスです。私は決してこのことの専門家でも何でもないので、一素人の発言ということで聞いていただいたらと思います。私のテーマは交通工学でして、道路上を動いている人と車について、いかにそれを分離するか、いかにそれを混ぜるかということも重要なテーマです。

沼島の観光を考えると、歩行者が沼島に住んでいる方、車が観光客というふうに思えばいい。これを分離してしまうと、確かに島の生活も守られるし、車も速く走れていいけれど、車の人はおもしろいことも何ともないわけですね。そうすると、上手に人と車を混ぜて、全体の効用といいますか、ハピネスを上げるという工夫が必要で、一定の分離を保ちながら調和をつくるという、すごく矛盾したことをやらないといけないということになります。

どのレベルで混ぜるかということは、結局、島の方、生活者の方がどのレベルまで許容するかということにかかっていると思います。いきなりたくさんの観光客がドーンとやって来たときに、じゃあどうしましょうなんていうことを議論できないと思う。仮にその観光客の方が徐々にふえていくとすると、そのプロセスの中で、どれぐらいのレベルであったら自分たちがよしとできるのかということを島の中で議論されて、その結果、決まることだと思う。だからこれがいいとか、この程度が望ましいとかいうことは、必ずしも事前に言えることではなくて、島の方々がそういったことをお話されて、決まるものなのかなというふうに思います。

先ほど平田さんの方から、限定というお話がありましたけども、人間は見てはいけないとか、来てはいけないとかと言われると、何か見てみたいし、行ってみたいと思うわけですね。ですから、何かそういったゾーンといいますか、場所をあえて島の中に幾つかつくって、生活が大事なので、あまりそこには観光客の方は入らないでということも言いながら、うまく調和を保つということが大事なのではないかとも思いました。

それからもう１点だけ。こういった沼島モデルを議論するということは、私の理解では、観光ということを１つのネタとしたまちづくり活動だと思っているわけです。住民の方にとってよい島ができるための１つのアプローチに過ぎない。ですから、ツアーを議論するということの意味は２つあります。

１つは、ツアーが売れるかどうかとは別の議論です。どんな観光ツアーができるかということをネタにして、島の皆さんがいろんなことを議論される。島はどんなのがいいのかということを議論されるためのネタになれば十分だという、こういう考え方が１つあります。ツアーは売れなくてもいいのです。

もう１つは、ツアーをせっかく作ったので、売れないといかんという、こういう立場の議論です。私は工学部なので、よいものをつくるということを考えるわけです。ところが、いくらよいものをつくっても富田先生、正司先生の経営学、経済学の人々が、それを上手に売ってくれないと世の中に広がらないわけです。だからいかに売るか、こっちもすごく大事。つくるだけじゃなくて、いかに売るか。

それには先ほどからあがっているガイドブックとか、情報とか、口コミとか、それらがすごく大事です。私どもの調査でも、調査結果を支配しているのは入力情報です。それぞれの観光資源の情報を学生（被験者）に与えて、その結果、行きたいとか、評価が高いかを尋ねるわけです。そこがもう根本的に重要なのです。その情

報をいかにつくって、いかにそれを広げていくかということを考えないと、いくら良いツアーをつくっても、残念ながら売れませんということになります。その視点をツアーづくりとあわせて議論されることが、大事なのではないかと感じました。

○　コーディネーター（富田昌宏）

どうもありがとうございます。私が思っていた以上の何かお答えをしていただいたようで、ありがとうございます。

それでは次に考えるべきは、えらいもうポイントが次々と恐縮なんですけども、こういうような動きを定着させ、そしてそれが長続きするために、どうしても皆さんの気持ちだとかいうようなものだけではなしに、全体をマネジメントする何か組織というような､そういったことも考えていく必要があろうと思うんですけれども、もちろん国であったり、県であったり、市というような、そういうようなところの動きというのは非常に大事だと思うんですけれども、やはり今回、今までパネリストの方々の発言に共通しているのは、やはり地元の方の動きというのがすごく大事だという視点なんですけれども。この点、中川さんがどう動かれるかというのは、これからもますます盛んにご活躍のことだとは思うんですけれども、そういうようなボランティアグループとは別に、何か全体を、問題が起こったりしたときに取りまとめていけるような、そしてまたそれがずっと続いていくような、そんな組織とかいうのはどんなものが考えられますでしょうか。ちょっと地元の立場からご発言いただければ幸いでございます。

○　中川宜昭委員

ちょっと今の質問に、真っ正面から私が答えられるかどうかちょっと、行政の絡みもあったりね。

先ほど、しかし私たちの考えた２面を持っておられるというお話、正司先生の、非常に興味深いと思うんですよ。１つは単に観光をどうするかという問題やなしに、そこに住む者たちに対しての非常に啓発が求められているということと、実はたくさんの人が入ってくる中で、これをどう受けとめるかという中に、取り組まなあかん地域の内面的な問題が非常にあって、いっとき３０年代に、島というのは非常に閉鎖的なもんを持ってます、何かよそ者というような。全国どこへ行ってもそうなんですが、地域が非常によそから入ってきた者を拒絶するという姿勢があるわけですね。

今はじゃあそれがどうなってるかというその問題も含めながら、実は我々がボランティア活動をやるというときにもいつも言ってるんですが、これは単なる外部の人に来ていただくことをどうお迎えするかという問題と、もう１つは、我々の地域に住む者たちが一体どう生きるのかという、この２つの面を持っとるわけですね。これは相反するもの、たくさんの人を受け入れるんやけど、実は受け入れるといいながら拒否しとる面もあったり、相反するものを抱えながら地域が揺れ動きながらいっとるわけで、そこに１つのやっぱりしっかりしたものが見えないと、ぐらついてくると、非常に功利的な面に走ったりとか、排他的な面に走っていくという、そういう面も抱えながらいっとるわけです。

そういうときに、果たしてこのボランティアの私的な善意というか、非常にちょっとマニアックな私の考えで動いとる者たちだけのグループで支えられるかという問題があります。きょうは行政の方から、市の方からもお二人の方が来られており

ますので、そういういろんな公的な部分と、どうやって支援を受けながらこれを組織化していくか。いろいろな提案を受けたものを私たち個人が受けて、それを抱えきれるかなという意味であってるかどうか。これはきょう市から来られてる方がおられますからその方たちと、どういう支援を得ながら組織化していくかという問題があると思うんですね。単に善意では、なかなか動いていかない部分があるんやないかなということも考えております。

○ コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございました。恐らく今、私が投げかけたような問題は、これから時間をかけて次第に形成されていくもんだと思っております。ありがとうございました。

それでは、ここまでフロアの皆さん方は単なる聞き手で、ぼちぼちちょっと発言したいというような方もいらっしゃると思いますので、皆さん方からのご質問であるとかご意見、時間の関係もございますので、簡潔に１人１点だけに絞ってご発言をお願いしたいと思うんです。

その際に、きょうは沼島からたくさんお越しになっておりますし、また、このお近くの方、あるいは遠くからお越しの方もいらっしゃるかもしれませんので、差し支えない範囲で、どちらからお越しで、お名前と、その２点だけちょっと前置きして、１つの問題に絞って質問なりご意見を、手短にお話いただければ幸いです。

どなたでも結構ですので、発言したいという方は挙手をお願いできますでしょうか。

○ 質問者（川島）

定年退職しまして、神戸大学の学生と支援センターのお仕事をさせていただいております川島です。

たくさん質問があるんですが、１つに絞れと言われますと、まず私どもがどこか旅行へ出たいと思うときに、一番最初に調べるのがホームページなんですよ。最近ホームページで、例えば沼島に行きたいとすれば沼島って調べます。沼島を事細かに紹介されているホームページというのは実在するんでしょうか。

○中川宜昭委員

「沼島」で検索していただくと、たくさん出てくると思うんです。特に小学校のホームページは私が校長の時代に、もう十何年積み重ねたのがあるんで、結構たくさんの資料が出てくると思います。

○ 質問者（川島）

あんまりたくさん出てくるのも、観光客にとったら何を見てええのやらわからへんでしょう。要するに、ポイントをついた観光ガイドホームページというのが絶対に必要なんですよね、初めて行こうとする人間にとって。だからそういうきっかけをつくってくれる。

実は私、釣りが好きで、沼島には何回も釣りに行ってるんですが、渡船に乗って島には渡らないんですよ。先ほど紹介された岩の上に乗って釣りして帰ってくると。ですから、島の中は実は行ったことがないんですよ。ただし定期船で行って、そこの波止場で釣りをするということは何回かやってるんですが、ところが定期船で行

って、着いて戸惑うのは何かというと、観光船で行ったときに釣りをするのはどうしたらいいのかわからない。要するに釣り舟は連絡先も何も、どこかにあるんだとは思うんですが、そこらにあまりたくさんの人がいてないですけれども、そこらの人をつかまえて釣り船を紹介していただくということをやったり、それから交番はあるのかなと思ったが、うん、ないん違うかなと。観光案内所は、うん、ないん違うかな。病院は、食事するところは、お宿は、連絡するところは、本当にどうしたらええのかわからない。

要するに、だれも人がいらっしゃらないところに、先ほどの話じゃないですけれども、グループ２、３人で着いて、結局、その島を知らない人間ばっかりが３人ほど船で着くわけです。そしたら、どうしたらええのかすらわからないという状況になっているのが実態だと思うんですよ。

ですから本当にきっかけをつくっていただけるような、本当に島に住んでない人の目から見て、島に行って、ここからどないしたらいいのかわからんという状況を払拭していただけるような案内、例えば連絡先。ボランティアが活動されているんであれば、観光案内はここへ電話していただいたら観光案内しますよ、ここへ電話していただいたら釣りのお宿を提供しますよ、ここは食事を提供しますよいうような小さな看板でもいいんですよ。定期船の着いたところに大きく、本当に大きく。小さく書いてあるのはあるんですよ、あるんですけれども、本当に大きく書いていただけたらなと。

○　コーディネーター（富田昌宏）

ありがとうございます。

実は、私も昨年８月３１日に初めて参りまして、行ってから同じ経験をいたしました。そのことは委員会でも発言をさせていただいて、これから少しずつそういう点。例えば１枚もののチラシのようなものとか、いろんなものを網羅したような紙が、自由にどなたでも取れるようなものが乗り場にあると。それも、できれば土生の港で淡路島側から渡られるときに、もう既にあれば船に乗ってる間にそれを見ていただけると。これからは船の乗り場のところ、あるいは船中で先ほどのＤＶＤビデオなんかが流れるとか、そういうようなときに連絡先は何だとかいうのが出るとか、いろんなことがあろうかと思いますので、これは本当に私もよそ者というと何ですけれども、経験をいたしましたので、すぐにでもやっていただきたいと思っています。ありがとうございました。

もうお一方、恐れ入ります。

○　浅野忠彦（大阪在住）

沼島出身の方々で全国に散らばっておる方々と、それから沼島に現在おられる方々の親睦、交流を図るために、昭和１６年ぐらいから「おのころ会」というのを先人たちが結成されてずっと続いております。

私はごく最近、１０年ほど前からその情報交換誌といいますか、機関紙の編集を担当しております浅野忠彦といいます。沼島出身で小学校にいました。

先ほど平田先生がおっしゃいましたが、１月２１日の非常に冬枯れのときにいらして５人で、帰りは１５人という残念な乗客だったんですが、私は去年、旧制高校の連中の集まりで沼島のことをいろいろ宣伝しておりましたら、そんなにいいとこならひとつ見てやろうじゃないかということで１７人ばかり、やっぱりツアーにち

ょっと連動しまして行かしていただきましたが、そのときに中川先生やら「ぬぼこの会」の皆さんに大変お世話になって、みんな感激しておりました。とてもいい話を伺ったりしました。

そのほかにも盆に行きましたんですが、結構乗っておりました、もう超満員に近いんです。ツアーで行きましたときには、私どものほかにも結構おったし、そして別船といいますか、２隻おられました。１隻は臨時便で子供たちが４０人ぐらいでしょうかね、４、５年の方でした。多いときには増便もしています。

**○コーディネーター（富田昌宏）**

今おっしゃるようにお客さんが多いときに、もうその前に社長もお座りでございますけれども、沼島汽船はいくらでも増便はできると。ただ、平均すると少ないということでございますので、非常に貴重なご意見をありがとうございました。

ぼちぼち予定しておりました時間が。パネリストが熱心に、あるいは皆さん方の情熱に押されて、ちょっと時間の経過が早いようでございますけれども、きょういろんなご報告でございますとか、あるいは皆さん方のご意見等々を聞かせていただいて、この沼島モデルというものを、これは沼島をモデルにして、それを全国に発信するということでございますけれども。

つくづく感じますのは、やはり離島というのは共通性もあるけれども、個性というのが物すごく強いところで、それこそが離島の魅力である。それは当然、沼島の魅力でございますけれども、そういうようなことで、いわば中央の国から当てられた光というものが、それぞれの離島に届くんですけれども、その届き方に差がございますし、こういう沼島で我々がいろいろ調査し、そしてまた地元の方々が考えられたこと。それをそのままではなしに、それぞれの土地の個性に合わせて、その熱意だけは発信できる。これは自信を持って言えるんだと思いますので、きょうここにお集まりの皆様とともに、沼島の人びとによる、沼島の人びとのための地域活性化というのが、これを機会により根づき、継続していくことを祈念いたしまして、このシンポジウムを閉じたいと思います。

本日はまことにありがとうございました。

（２）沼島報告会

平成 21 年 2 月 7 日（土）13：30～15：00、南あわじ市沼島出張所大集会室にて開催した。集まりやすい土曜日の午後に開催したこともあり 84 名の参加であった。

沼島モデル紹介ビデオを上映した後、正司健一委員長（神戸大学大学院　経営学研究科教授）から沼島モデルの発表を行い、引き続き地元参加者との質疑応答を行った。